イデアール

都筑遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イデアール

【Ｎコード】
Ｎ８８６５Ｗ

【作者名】
都筑遥

【あらすじ】
大国ヒルディアとシルギードに挟まれた無武装商業都市・カラム。両国の関係が悪化し、領主家族が失踪した事により勘当同然に追い出されていた義理の息子・ヴァースへとその地位が押しつけられる事になった。
自治を守るための盾にされたヴァースが選ぶ道とは――
主人公男女問わずのアイドル属性。実力よりカリスマで戦うお話です。

プロローグ

コン、コン。
滅多に――というよりもまず人など訪れる事もないであろう、森の外れの掘っ立て小屋。見よう見真似、手探りでヴァースが作っただけの物だったから倒れないだけ上等だという、そんなレベルの代物だ。
その戸を叩く、規則正しいノックの音。
（何だ？）
来客などヴァースがここに移ってから初めてだった。勿論予定も無い。
（迷ったとか？）
こんな金も何も無さそうな小屋に物取りは無いだろう。町までは少々遠いから迷い込んでしまった誰かかもしれない。
そんな事を考えているうちに、二回目のノック。
道案内をするだけならそう時間もかからない。それより去る気配のないノックの方が鬱陶しい。
万一にでも押し入られるのも面倒だ。
鍵代わりのつっかえ棒を外し、扉を開く。そこに立っていたのは女だった。
「ヴァース・ファウストフィート様ですね」
ぴしりと隙無く背筋を伸ばした彼女に相応しい、凛とした声音。淡い紫の髪を頭の後ろで一本に纏めただけの簡単なスタイル。黒に近い濃藍の瞳が予想外の来訪者に呆けているヴァースに逸らされる事無く注がれている。
真っ直ぐ見られるだけで女性の眼には力がある。慣れていないせいもあるがヴァースはそれが少々苦手で自分から少し視線を逸らした。
「シア・ミディアラと申します。貴方のお義父上であるリカルド・ファウストフィート公が失踪致しましたのでお迎えに上がりました。

私と共にカラムに戻り、ファウストフィート公爵を継いで下さいませ」
「――は、ァ？」
唖然とした声を上げ、内容を一拍遅れて理解してから扉を開けてしまった事を激しく後悔した。
「冗談じゃねえ。大体俺にファウストフィートの血は流れてねえしとっくに縁切りしたも同然だ。その俺が何で領主なんか」
「されたも同然と実際に縁切りされたのとでは天と地程違います。ファウストフィートの名を持つのは貴方だけなのです。否と仰るなら実力で連れて行かせて頂きます」
シアの目は本気だった。腰に佩いた剣に手を掛け次のヴァースの言葉次第ですぐさま実行できるようにスタンバイしている。
「私と共に、カラムにお出で下さい」
「……脅しだろうが……」
ヴァース自身、幼い頃は教養の一端として武術を嗜んだ事がある。無力な自分というものが嫌いだったから、我流で今も続けている。――だから何となく判る。彼女は自分よりも強い。加えてこちらは丸腰だ。
「……行きゃあいいんだろ」
「はい」
「継いでも何もしねえぞ」
「結構です。貴方は領主としていて下さればそれでいい」
それでも正直、御免だった。だが痛い思いをして連行されるのも馬鹿馬鹿しい。
「判った。さっさと行くぞ」
「宜しいのですか？　準備するぐらいは待ちますけれども」
「見ての通り、盗って価値のあるものは何もねえよ。――それに、長く空ける気もねえ」
「……では、参りましょう」
就く前からの辞任宣言はさらりと無視してシアはヴァースを促し

彼の治める事となる町へと向かった。
国境の自由都市、カラムへ。

第一章　自由都市カラム

「――……っ……」

カーテン越しに差し込む朝日に、ヴァースはまだうとうとしながら寝返りを打つ。このルベルリア大陸には存在しない金髪が陽光を弾いてちらちらと輝いた。

一回起きてしまうともう眠気はどんどん失せて行き、諦めてのそりと上半身を起こす。

「……朝か」

この一月強、怠惰になろうとすればいくらでも出来る生活を今のヴァースは送っていた。

シアに連れられて来たカラムで滞りなくファウストフィート公爵の名を継ぎ、領主館で過ごしている。

無論、領主の仕事がそう暇な訳はない。本来ヴァースがやるべき仕事の殆どをシアがこなし、どうしても直筆のサインが必要な書面だけが回されて来るのだ。お陰でヴァースは一ヶ月経った今もカラムの事を何も知らない。

かなりハードな日々を送っているらしいが、知った事ではなかった。

（それぐらいしてもらわねえとな）

何しろこんな面倒な町に自分を連れて来たのだ。それぐらいやって貰わなくては困る。

自由都市の名を持つここ、カラムはどこの国にも属さない土地だ。

その歴史は決して古くはなく、数十年前、大陸随一の大国であるヒルディアと新進軍事国家であるシルギードが長き戦争に自国の国力弱化に懸念を覚え、停戦を結んだ時から始まった。

どこの物でもない土地を国境とし、その間の都市を軍事・政治介入一切禁止の自治区として作り上げたのである。

作られた理由はとても誇れるものではなかったが、何しろ大国に挟まれているという立地の都合上流通の便も良く、また武力による圧

力から大陸全体で守られたその都市が発展するのにそう時間は掛からなかった。
優れた芸術品や知識の宝庫、そして財産――
最早自治区にしておくのは勿体ない富の町と化していた。
しかし大陸全体でこのカラムへの政治、軍事干渉が禁じられている以上、これ程の旨味のある都市にも理由なく手出しは出来なかった。
領主ファウストフィート公の失踪が起こるまでは。
ファウストフィート公リカルドとその息子は失踪し、カラムの領主の座は空席となった。そこで遥かに遠い親戚筋だという者が名乗りを上げてきた。
ヒルディアと、シルギード両国から。
（機会があんなら金は幾らあってもいい）
ファウストフィート公が失踪したのも両国からの圧力――はっきり言ってしまえば暗殺を恐れ、耐えられなくなったからだという話が有力だ。
そうだろうとヴァースも納得した。身命を賭して町を守ろうなどという人間ではなかった、彼等は。
空席のままではヒルディアにしろシルギードにしろ、その干渉を突っぱねられない。そこで白羽の矢が立ったのが間違いなくどことも関係のないヴァースだった、という訳である。
一応ヴァースの母は正室だったので、連れ子であったヴァースも一緒にファウストフィートの名をもらっている。母がどうしてもとヴァースを手放すのを拒んだおかげだ。
本当の所は血が繋がっているかどうか定かではないような遠縁筋よりはまだ近しい。それに何より、市民達は絶大な声でヴァースを望んだ。それを押してまで他国からの干渉で排斥は出来なかったのだ。
ファウストフィートの名前を持っていてくれるだけでいい――シアの言葉はそういう意味だ。
ぼんやりと町の中央に建てられた城から町を眺めていると、静かに扉がノックされた。

「シアです。宜しいですか」
「ああ」
「失礼します」
扉を開けて入ってきたシアの手には薄く纏められた書類の束。おそらく今日はこれで終わりだろう。
「サインをお願い致します。明日取りに伺いますので」
「判った」
「有難うございます。それでは」
すいと頭を下げ、早々にシアは踵を返した。ヴァースがファウストフィートを継いで一ヶ月強、彼女との会話は常にこんな感じだ。それは全く構わない。むしろヴァースの方が面倒がってそうしたと言っていい。シアにしてみればヴァースにやる気があるに越した事はないので始めはそれなりに町の事なども聞かされたのだが、関心を向けなかったヴァースに尚もそれを要求したりはしなかった。だから普段ならこれで終わり――なのだが、ふと思いついた疑問を彼女に向けてみた。
「なぁ」
「はい？」
ヴァースから呼び止められた事に少々驚きつつ、シアは足を止めて振り返った。
「何であんたはファウストフィートに拘るんだ。確かにヒルディアなりシルギードなりを受け入れりゃゆくゆくは統合されるかも知んねえ。間違いなく便宜は図る様になるだろうさ。だがあいつ等が欲しいのはこの町の利だ。支配者が変わったって別に何も変わりゃしねえよ」
「いいえ。どこかの属領になった時点でもう自由ではありません。この町が自由なのはどこの物でもないからなのです。それにこの町が不可侵領域である事でどれだけの人が安寧を得ているか知っていますか？」
「……」

国力の衰えを理由に停戦してから数十年。決して短い年月ではない。それこそ国力を再び回復できる程度に。
間にカラムが存在するが故にお互い進軍が出来ない。それもヒルディアやシルギードがカラムを厭う理由の一つだ。
そして属領となり、戦が再発した日には真っ先に戦場となるのがここ、カラムだ。
「ここは私の、今まで住んできた町です。その大切な場所を、人を、守りたいと思うのが不思議な事ですか？」
「……俺は場所にも人にも執着はない」
「そうでしたね。けれども貴方はここにファウストフィートの名を持って居て下さっている。それで私には充分です」
シアは始めからヴァースに期待という事をしていない。勿論御免だ、ただでさえ面倒だというのに。
「では、失礼します」
そう言って去ったシアを、今度は呼び止めはしなかった。すっきりはしなかったが納得できる理由も貰って、用は済んだ。
（守りたい物を守るには力が要る）
力がなければ理不尽な強者に弱者は踏み付けられるだけ。それは避けようのない事実だ。今のカラムと同じく。
しかしそんな事、他人のヴァースが言うまでも無く住民皆が判っているだろう。だからこそヴァースを風除けに欲したのだから。
正直、風除けの盾など御免である。――だが、彼等は必死だ。
ヴァースが少しぐらい、付き合ってもいいかと思うぐらいには。
場所にも人にも思い入れの無いヴァースではあるが、その必死さには覚えがある。どうしても守りたいものの為に、必死に足掻くその姿。
「どうせどうにもなりゃしない」
この戦いに勝ちはない。何故ならどう足掻いても結局カラムに力がないからだ。
このまま領主の座に居座り続ければそのうち自分は殺されるだろう。

自分一人の人生だ。楽に殺してくれるならそれもいい。
「……」
シアが置いていった薄い書類の束に手を伸ばし――しかし気分にならずに手を落とし、だらだらと入ったままだったベッドから起き上がり窓から町を見下ろした。
自分の立場を考えればあまり賢いとは言えないのだが、鬱々とした気分に勝てずヴァースは城の外へと足を向けた。

1―2

カラム領民は基本的にヴァースに対して好意的である。自分達の町を守る為の必要な盾だ、当然と言える。
（そうじゃなきゃ、こんな目立つナリで外出やしねーけどな）
買ったリンゴの値段もおまけしてもらって、歩きながらかぶりつく。擦れ違った人全員が必ず足を止め振り返り、その一挙手一投足を見られるのは鬱陶しいが子供の頃からそれは同じだ。もう慣れた。
「――？」
表通りから裏通りへと続く脇道に通り掛かった時、ガシャンという物の壊れる穏やかでない音を聞いた。続いて多くはないが、複数人の足音。
きっと関わり合いにならない方が良い物騒な事態だろう。――どうするか。
一瞬迷ったが、ヴァースは裏路地へと足を向ける事にした。
もし女だったら後で知ってしまった時寝覚めが悪い。それだけだった。
音を頼りに現場を探し当てる。そう奥まった所でもなくすぐに見付かった。
（何だ）
しかしその光景を見てヴァースはさっさと踵を返そうとする。一対二と、思っていたより人数は少なかったが光景自体は思っていた通りの代物。ただし襲われているのは旅人風の少年だった。ヴァースよりも若干年下、だろうか。
これが町の一市民であるならばまた話は別だが、旅人――それも今緊張状態にあるカラム周辺に来るのなら予め防衛策を持って然るべきである。
避けられる面倒は避けなかった方が悪い。
そうやや冷ややかな感想をヴァースは下す。

幸い相手にはまだ気付かれていない。だが引き返そうとしたヴァースの姿を少年の方が捉えてしまった。
続いて自分達の背後に焦点を合わせた少年の眼に男達も気が付いてしまう。
「何だテメェ！」
振り返った先に居たヴァースをそう怒鳴りつけ顎をしゃくって、たった今ヴァースが引き返そうとしていた路地を示す。
「見せもんじゃねえ、さっさと失せ――」
「おい、待て」
追い返そうとした男の仲間が肩を掴んで言葉を止めた。
「こいつ、ファウストフィート公のヴァース様じゃねえか？」
「……本当だ。本当に金髪紫眼かよ。こんな所にフラフラ出歩くたァ、金のある奴ってなァ賢くねえなぁ、おい」
「丁度良い。こいつも一緒に捕まえちまおうぜ。ヒルディアでもシルギードでもきっと高く買い――がはっ！」
突っ立ったままだった自分に伸ばされた手を払い、間髪入れず男の顎を蹴り上げた。金属で補強された靴、更に男の力で蹴れば、かなりの威力だ。
髪や眼と同じくヴァースの色素は若干薄く肌も白い。ややきついが整った顔立ちと相まって体を鍛えているとは――ましてこう攻撃的だとは思っていなかったのだろう。
「気安く触んな。売り物じゃねえんだよ」
買う・売るという単語はヴァースの中ではタブーだ。髪と眼が珍しいというだけで母と共にそういう目に遭い掛けた事は少なくない。地面に転がってのたうつ男の頭を容赦無く踏み付け、残ったもう一人を睨み付ける。
「テメェはどうする」
「ひ……っ！」
恐れ、戦いた声を上げると男は足を縺れさせながら逃げ出した。踏み付けていた男から足を退かすと、そちらも戦意など最早欠片も

無く相方の後を追って逃げて行く。
「助かりました。有難うございます」
「別に助けた訳じゃねえ」
服を叩いて立ち上がった少年からの礼にヴァースは素っ気なく答えた。彼はヴァースが引き返そうとしたのを見ていたはずだ。彼を助ける事になったのはヴァース自身が絡まれたからに他ならない。
「判ってます。でも助かった事は助かったんで」
微かにそのワインレッドの眼を細めて彼は楽しそうに笑った。本当にそう思っているのかどうか判らない程少年の態度は余裕だ。年若くまだ十代の半ば程に見えるのだが、荒事に慣れているのかもしれない。
「折角お会いしたんで、ついでに一つ、聞いて良いですか」
「何だ」
「どうしてファウストフィートを継いだんでえすか？」
「継がされたんだよ」
心外だ、と口にはせずにそう吐き捨てると少年は苦笑して頷いた。
「そうですね。形としては。でも逃げる事ならいつでも出来るんじゃないですか？　腕も立つようだし、こんな所をフラフラしているぐらいですから」
確かにそうだが、今の所ヴァースに逃げるつもりはない。彼が聞きたいのは継いで、その椅子に座り続けている理由の方だろうか。
「故郷だなんて言った所で貴方には大した思い入れも無いでしょう」
「……」
ヴァースの出生はカラムやその周辺ではすでに知れ渡っている。だから知っている事自体はおかしくはない。
――ただ、やはり半ば縁切りされた状態から領主に就いたなどと聞こえの良い話ではないし町の人間は基本ヴァースの不利になるような話はしない。
なので耳に入れようとしなければ入らないぐらいの話ではあるのだ。そんな話を通過するのに立ち寄っただけであろう旅人が何故気にし

ているのか。
「なのに何故、こんな所に居るんですか？」
「……必死だからだ」
別に答えてどうなる内容でもなかった。
命を懸けるには安すぎると、そう信じないかと思ったのだがヴァースの答えに少年は微かに目を見開き、それからおもむろに自分の耳に飾られていたカフスを外してヴァースの耳へと着け直した。
「テメェ！　何す」
見ず知らずの他人から物を受け取る程警戒心は薄くない。まして身に着けるなど妙な呪いでも掛かっていたらと思うとぞっとする。
（……何もない、みたいだな）
「呪いじゃありませんよ。俺はちょっと貴方が気に入りました。フアウストフィート公」
「はァ？」
「それは差し上げます。貴方の立場ならきっと役に立つと思うので」
「――おいっ？」
一体何であるかの説明も無いまま去って行こうとした彼の肩を掴んだ手がするりと手応え無く通り抜けた。
「――ッ！」
ぞわっと一気に鳥肌が立ったが、顔を上げたヴァースの眼に霧状に散った魔力の流れと遥か遠くに少年の背中が見えた。
（何……？）
世に満ちる魔力の流れというものを見る事の出来る技術は魔術の中に確かにあるが、高位魔術に分類される代物だ。勿論教養程度の嗜みしかないヴァースに使える代物ではない。
まさかと思って着けられたカフスを外すと、綺麗さっぱり見えなくなった。
「これか……」
高位魔術を付加した魔道具となれば相当に高価な代物――というよりも、おそらく値段は付けられない。何しろ創り手が限られる。

手に取って見たそれは細工も精緻で美しく、装飾品としても申し分なかった。
（何者だあのガキ）
少しばかり躊躇った後、ヴァースは再び耳に付け直した。確かにこれは役に立ってくれるだろう。
すっかり静かになった路地を後にして表通りに戻ると、たった今飛び込もうとしていたシアとばったりかち合った。
「あ」
「ファウストフィート公ッ。何をしているのですかっ」
口を開くなりのその言葉にヴァースは面倒そうに後ろ頭を掻く。女の怒鳴り声は苦手だ。
「見りゃ判るだろ。息抜きに外出ただけだ」
「息抜き……っ。あっ、貴方はご自分の状況が判っているのですかっ！」
「一応判ってると思うけどな」
冷めた口調でそう言われ、シアの方が気遅れて押し黙った。ただその名前を持つだけで命を懸けさせてしまっている事への後ろめたさは感じているらしい。
「で……っ、でしたら、不用意に外出なさるのはお控え下さい」
「ずっと城の中じゃ息が詰まる」
「ならばせめて共をお連れ下さいっ」
「他人と一緒で息抜きになるか」
「――っ。貴方は自分の命が惜しくはないのですかっ」
危機感、というものが欠如したヴァースの言い様に思わずシアの方が声を荒げる。しかし振り向いたヴァースの眼は酷く冷めきっていて、唇は皮肉気な笑いを作ってさえいた。
「別に。苦しまなくていいならそれでいい。だがあんたはそういう俺の精神性に感謝していいはずだぜ」
「それは……ッ」
たじろき、息を詰めた後でシアは目線を逸らして頷いた。

「――ええ、そうです。だからこそ私は貴方を失う訳にはいきません。お判りでしょう」
「判ってる。まァなるべく気を付けるさ」
多少腕が立とうとも、一対多数になればどうにもならない。ましてヴァースは達人や一流といった部類で判断するとそう強くはないのだ。
「……戻りましょう、ファウストフィート公。息抜きと仰るならもう十分なはず」
「あぁ、そうだな」
頷き、先に立ったシアについて歩き出す。
（どうでもいいんだ、別に）
自分の事だというのに酷く無気力だとは自分でも思う。しかしそれもどうでもいい。
世の中と真っ正直に向き合っていたら自分が疲れるだけなのだから。

1―3

ザワ、と葉擦れの音に反応して目を向けて、ヴァースはパタリと読んでいた本を閉じた。
夜もすっかり更けてしまってそろそろ寝ようと思っていたから丁度きりは良かった。気分は冴えないが。
「判ってるぞ。ばれてるなら隠れてる意味はねえだろ」
葉擦れのした方向に気配を頼りに――ではなく、ややずれた角度に向けてヴァースはそう声を掛けた。
立て掛けてあった剣を鞘から引き抜き真っ直ぐそちらを見ていると、ヴァースが当てずっぽうで言っているのではないのを認め、ククと喉で笑った声を共に男が窓から姿を見せた。
年齢は二十の半ばから少し上、恐らく三十路には届いていまい。装いは白のコートと黒のインナーの二層。そしてダークグリーンの腰まで届く長髪と、夜目にも目立つ出で立ちだ。
にも拘らず男は今の今まで周囲と同化し姿を消していた。――幻術だ。
「よく判ったな。そう魔術適性が高いとも思えないんだが」
不意打ちに失敗したというのに、男はむしろ楽しそうだった。
「一応聞いておくが……物盗り、じゃねえだろ」
「あァ、勿論。人探しついでの仕事だ！」
男の足が一歩緩やかに前進した――次の瞬間、ヴァースは男の姿を見失った。沸き起こった寒気と本能に従い身を捻って剣を首の辺りに持ち上げる。
「っ！」
ギィン、という金属同士のぶつかるような高い音を立て、しかしヴァースの眼に映ったのは刃と鍔競合う人間の手刀だった。
正確には生身ではない。手刀の周りに研がれた風の刃が纏わりつき、それが金属の刃と拮抗しているのだ。

「見えてるか？　中々だぞ！」
「がッ！」
間髪入れず蹴り飛ばされ、受け身など取る間もなく床を転がる。
それでも眼は襲撃者から逸らさなかった。
手に纏わせた風の刃を維持し、ヴァースへと走り込みながら更に彼はもう一つの魔術を構築し始めている。
普通に考えて、一つ一つが高い集中力を必要とする魔術を二つ同時に発動させながら、更に相手に斬りかかってくるなど有り得ない。
だが今現在男はそれを成し、放とうと構築されていく魔力の奔流に一切の乱れも無い。確実に発動させてくる。
「リンデンバウムだ！　殺す前に名を名乗るのは久し振りだぞ！」
喜々として瞳に凶悪な光を宿し振り降ろされるリンデンバウムの風の手刀を何とか避け、あるいは弾く。彼の動きについていけてる訳ではない。
どんな形であれ魔術を使えばそこに不自然な流れが出来る。リンデンバウムの意思に確実に沿って動くので来る場所を視て動いているだけだ。
しかし、それで何とか防御できている程度。素で戦っていたら一番初めの幻術に気付かず殺されている。
（ヤバい）
彼の振るう手刀を捌くので精一杯だ。もう魔術が構築され終わる。
その魔術そのものを知っていれば名前も判るであろう程にはっきり視える。凝縮された魔力量から見て相当に広範囲かつ、威力もある代物だろう。
間に合うか防げるか、両方とも判らないがとにかく盾を作って凌ぐしかない。
驚異的なスペックで戦っているリンデンバウムもやはり人間ではあるらしい。発動前になって意識が魔術の方へと向いたか若干斬り合いの手が緩くなる。――それもヴァースの眼が魔力を見ているからそれと判った程度の変化だが。

「――うん？」
ヴァースが防御の為の魔術を構築し始めた途端、リンデンバウムは訝しげに呟き眉を寄せ、後は名を呼ぶだけだった魔術を惜しげも無く四散させた。
「っ？」
平然と行っていた高位魔術の無言構築だがやはり影響は大きかったのだ。解いた途端に変わったリンデンバウムの動きを見失って、まともに間合いに踏み込まれ掌底をくらう。
速くなったとかそういう類ではない。直線的だった動きに慣れた目が純粋に彼本来の体捌きに対応出来なかっただけだ。
「が……ッ」
掌底を打つ前に風の魔術も解除されていて、力の手加減もされていた。意識を失わせないためだ。
「どういう事だ？」
言いながら膝を着き、這うような姿勢で咳き込むヴァースの肩を内側から蹴り上げ仰向けに倒すとそのまま体重を掛けて踏みつける。
（……三つ、だったのか）
痛みで生理的に滲んだ涙でぼやける視界で、見上げたリンデンバウムの眼にも薄く魔術が掛っているのに今気が付いた。おそらくヴァースが視ている物と同じ、魔力の流れを見るための物。
「お前、何で発動前に俺の魔術が判った？　妖精の瞳（グラム・サイト）を使ってる訳でも無し」
ヴァースが自分と同じく妖精の瞳を使って魔力を見ているのならリンデンバウムにはそれが視える。間違いなく使っていない。
「勘じゃあないだろ？　お前の眼は間違いなく風の散刃（シェアシュナイデン）を見てたもんな？」
（良く、見てやがんな）
リンデンバウムの瞳に掛かった魔力さえ見落としていたヴァースとは対照的だ。深夜にこれだけ騒いで誰も来ないという事は予め結界でも敷かれていたか。だとすればまず助けは来るまい。

（終わったな）
さっさと一思いに殺ればいい。だというのに観察するようにヴァースを見下ろしたままリンデンバウムは動かない。
「お前、魔力が眼で視えるのか？　だとしたら面白いが……」
顔を近付け澄んだ紫の瞳を覗き込み、ほうと感嘆の息を吐くと手を伸ばして髪を梳く。
「凄いな。本当に金髪だ。……顔も綺麗なもんじゃないか」
言いながらついとなぞる指先に生まれた刃が軌跡の通りに頬に赤い筋を作っていく。
「素材としては面白いが、武術も魔術も楽しめるレベルじゃないな。――やっぱり、死ぬか？」
「……そのために来たんだろうが。テメェは」
ふいと顔を逸らしたヴァースの動きに合わせてさらりと髪が流れる。その下の耳に飾られたカフスを見て、驚いたようにリンデンバウムは目を見開いた。
「お前、これ……どこから手に入れた？」

1―4

「どうだっていっ、ぐっ」
言葉の途中で問答無用で殴られ続きは失われる。
「答えろ。これを持っていたのは十七ぐらいの赤毛のガキだろう」
「っ……？」
すぐさま脳裏に裏路地で助けた少年が思い浮かんで、それが表情に出てしまった。途端ぐっとヴァースの首を押さえつけるリンデンバウムの腕に力がこもる。
「どうやって手にした。そいつは今どうしてる！」
（何だ……？）
先程までは表情だけが病んだ笑みを造る無感情に等しいぐらいだったのに、今のリンデンバウムには明らかに感情があった。動向を気にする、という事は『探し人』とやらだろうか。
探し人、イコール殺す相手、だと思っていたのだがどう見てもそんな感じではない。
「答えろ」
「……何で盗ったみてェになってんだ。確かにテメェの言う通りこれは赤毛のガキの物だったよ。貰っただけだ」
「……」
じっとヴァースを観察しながら言葉を聞いて――ややあって僅かに力を抜く。勿論抜けられる程緩くはないが。
「そのようだな。お前はあまり嘘が上手くなさそうだ」
ゆっくりと手を伸ばし、再びリンデンバウムはヴァースの髪を弄う。
「ふぅん……イシュタルが、な……」
（イシュタル……）
流れからするにそれはあの少年の名前だろう。呟いた声にはやはり優しい響きがあって、こんな事をしていても人は人かと乾いた笑

いが込み上げてくる。
「基本的に俺は自分が殺す相手が大好きだ。俺に至上の快楽を与えてくれるからな」
「……一般的にそれは『好き』とは言わねえ」
「クク、そう言うな。それが性なんだ。愛情を識ってる俺が言ってるんだから俺の中では歪んでない。――別にただ殺すだけでもそれはそれで楽しいが」
先程イシュタルの名を出した時とは別人のようにリンデンバウムの表情は狂った愉悦に歪んでいる。表情筋だけを滑る、感情の見えない笑い方。
「折角なら、美味しくなるものはより美味しい状態で食べたいと思わないか？」
「……俺はさっさと楽に殺って欲しいんだが」
「それは有り得ないな。お前みたいな傷つけ甲斐のある綺麗な奴を短時間で失うのは勿体ない。ゆっくり声と顔は楽しませてもらうが」
くつくつと笑ってヴァースを見るリンデンバウムの眼はそこだけ本物の喜色が見て取れた。
――よりによって嫌な相手に捕まった。ヴァースの希望とこの男は正反対だ。
「――リンデンバウム。この名前に心当たりはないか」
「ある訳ねえだろ」
暗殺者の内でどれだけ有名だろうと知った事か。出来れば一生関わりたくないし、これからも出来る限り突っ込みたくない世界だ。
「個体名にはそりゃないだろうが『名前』を聞いた事はないのか？俺の仕事と併せて考えてみろ」
リンデンバウムは菩提樹の意を持つ。そしてその仕事はどう考えても暗殺だろう。
「――っ！」
思い当たるものが一つあって、ヴァースはぎょっとして眼を見開く。そのヴァースの反応に満足したようにリンデンバウムはゆった

りと頷いて見せた。
「そうだ。軍師一族シェアディールに飼われた護り樹だよ」
軍師一族シェアディール――与した側に必ず勝利をもたらすと言われる戦場の軍神。
彼等は決して利害では動かず、ただ民の声と己の正義に忠実で、故に権力者達から重用され、同時に恐れられている存在だった。
自然その命と知識は狙われる事が多く、その身を守る為に作り上げられるのが護り樹と呼ばれる人間の盾だった。
「この意味、判るな？」
「……シェアディールが、ヒルディアかシルギードについたのか……」
「そういう事だ」
ニィと毒々しい笑みを唇に浮かべリンデンバウムは肯定した。
――判っても構わないという事か。
「イシュタル・シェアディールを探せ、ヴァース・ファウストフィート。お前がカラムを守るにはそれしかない」
（イシュタル……あいつが、シェアディール……）
「お前は必ずこの町を守る」
「何……？」
確信したリンデンバウムの物言いに、当人であるヴァースの方が戸惑って聞き返した。当然だ。誠心誠意で守るつもりなどないと自分が一番判っている。
それを何故、会ったばかり――どころか殺しに来たような相手にそんな事を言われなくてはならないのか。
「折角だ。生きる為に足掻くお前を殺してみたい」
する、と首を押さえつけていた手を離すと、立ち上がって窓まで歩み寄り縁に手を掛けた。
「それまでその首、預けてやる」
ひゅっ、と腕を一閃して風を切るとそのまま窓から姿を消す。あぁ帰ったのかと床に転がったままぼんやりと頭が理解してからとっ

くに自由になっている体を起こした。
「……痛て」
そうして動き始めて、初めて自分の首が横一線に斬られているのに気が付いた。最後の風がそうだったのだろう。
「……馬鹿馬鹿しい」
シェアディールがどこに付こうがカラムがどうなろうが知った事か。
（守りたがってんのは俺じゃねえ）
ぴりとひり付く喉を押さえ、治癒魔術を掛けながら息を吐く。
（どうだっていいっつってんだろうが。別に……）

第二章　覚悟と理由と心の差

リンデンバウムの襲撃から一夜明け、首の傷も頬の傷も治癒術の力もあって塞がる事は塞がった。ただし痕まですっきり綺麗に治った、という訳ではなく一目でそれと知れてしまう。
純粋にヴァースの技量の問題である。
「ったく……顔に傷つけやがって。誤魔化しようがねえだろうが……」
転んだ、擦り剥いたと言うには真っ直ぐ鋭利に切られた傷跡。誰が見ても刃物か、それに準じるものだと判ってしまうだろう。
……鬱陶しい護衛だ何だが増えるかも知れない。
ヴァースを守ろうという気概は感じるが、何分実力は伴っていなかった。
カラムは無武装が原則なので軍隊というものは存在しない。自由都市の名の通り個人が技術を磨く事に対しての規制はないが都市としての武力はなく、また平和な町事情から個人技術も高いとは言い難い。せいぜい町のゴロツキを抑えるのには充分だねというレベル。町の治安もそういった一般市民の有志が自発的に守っていて、それで充分間に合ってきていたのだ。
――何にしてもこの城の中で一番腕が立つのがシアで次がヴァース本人という有様では、それら町の有志に期待するのも酷というもの。そんな護衛が何人付いてもその為に腕を磨いて送り込まれて来るプロフェッショナルな暗殺者を相手に何が出来る訳もない。
（見張られんなァ勘弁なんだがな）
少年期を過ぎ、母が死んでファウストフィートを出た辺りから人付き合いという人付き合いをしなくなったヴァースには慣れない人の気配というだけで気疲れするのだ、実は。
（しかしシェアディールか。元々勝ち目なんかねえ戦いだが、ますます逃げる手もねえな）

シェアディールはどちらに付いたのだろう。流石にそんな親切に教えてはくれなかったが。
（……つーか、イシュタルって『シェアディール』なんだろ。何でカラムなんかうろうろしてたんだ。野郎の言い様じゃイシュタルは引き込めそうな……ハッ、まさか）
誰が好き好んで一族同士で争いたいものか。
護り樹が付くのはシェアディールの当主だけなのでヴァースを殺そうとしている方が一族の意志だ。そんな中でイシュタルを引き込めるはずはないし――
（何で俺がんな事しなきゃならねェ）
自分には関係ない。関係ないのだ。
大体、そんな大きな力は持っていない。力が無いまま関わった所でどうしようもない現実を見せつけられるだけで――……
「――っ」
（馬鹿馬鹿しい！）
そこまで考えて、心の奥に沈めた澱が浮上しそうになってヴァースは無理やり思考を打ち切った。力があれば関わっていくとでも言うつもりか。
（冗談じゃねえ）
どうせ負ける戦い。関係など無いのだと何度も自分に言い聞かせる。
自分の手が及ばないものに心を寄せてはならない。それが叶わなかった時――傷付くのは自分なのだから。
その傷の痛みを知って、もう味わいたくないと思ったのだから――
コン、コン。
「！」
いつも通り、ここ最近ですっかり耳に馴染んだ規則的なリズムのノックにはっとして勢い良く顔を上げた。物思いに耽っていたせいの過剰な反応である。誰もいなくて良かった。
「ファウストフィート公。よろしいですか？」

「……ああ」
ここで嫌だと駄々を捏ねても傷跡が消えるまでの二、三日をシアと顔を合わせない訳にはいかない。そもそも怪しまれるだけだ。
（……大した事じゃねえんだし）
「失礼します」
後ろ手に扉を閉め、入って来たシアはヴァースを見るなり絶句した。
「ファウストフィート公、その傷……」
「見ての通り、大した事はねェ」
両方共殺す為に付けられた傷では無い。首元にあれば中々そうは見えないだろうがこちらの傷を付けられた時は、正真正銘殺意すらなかった。
「――昨夜、ですか？」
「ああ」
「……申し訳ございません」
ぐっと唇を噛み締め、悔恨の表情でシアは深く頭を下げた。
「別に、こうして何ともなってねえしな」
もしリンデンバウムが退いていなければ、今頃自分は見るに堪えない有様で発見されていた事だろう。その最中であればカラムやシアに呪いの言葉の一つでも吐いていたかもしれないが、無事だったのでそれも無い。
「いいえ！　私は貴方を守りきるつもりでカラムへ連れて来たのです！　……出来ると思っていました。なのに気が付きもしなかった……ッ」
固く握られた彼女の拳が震え、爪が食い込むのを半ば唖然とした気分でヴァースは見ていた。
――そこまで責任を感じられるとは思っていなかった。
せいぜい、手練れが来たならそれ相応の準備をしなくてはとか、その程度だと。
「止めろ。女に護られる程弱かねえし、傷付くのを見るのも気分の

良いものじゃねえ」
「ファウストフィート公……」
シアの手を取り指を解すと、微かに血が滲み傷となってしまった爪痕を癒す。
ヴァースに取られた手の居心地の悪さに、しかし決して優しく扱ってくれる男の手が嫌な訳でもなく、気恥ずかしさに頬を微かに染めながら治癒が終わるのを大人しく待つ。
ヴァースが手を離した後の行き場に困り、不自然にならないか心配しつつ体に寄せる。
――当のヴァースに他意はなく、気にもしなかったようだが。
「ありがとうございます」
自分を気遣ってくれた事に対して、生き残ってくれた事に対して、そしてこの場所を捨てないでくれた事に対しての、礼。
「けれど私が決めた事でしたから。貴方は必要な人だから」
「……」
「申し訳ありませんでした」
「……なあ、あんたは本当にこの町を守れるとか信じてるのか？」
時間稼ぎにはなった、確かに。だがそれは問題の解決にはならない。
いや、暗殺という手段にしろシェアディールはとにかく動き出して来た。時間稼ぎももう終わりだろう。今すぐにでも正面切った何かが起こってもおかしくない。
それに抗する策も武力も、何も持っていないというのに。
「そ、それは」
ヴァースの問いにシアは答えを返せなかった。
――そう、シアとて信じてはいないのだ。このまま誤魔化し、ヴァースを領主としてカラムを守っていけるだろうなどと、都合のいい事は。
「判りません。けれど終わった訳では無いんです。私は諦めたくありません！」

それでも現実に足掻き、戦おうとする彼女の必死の瞳に、見てしまった残酷な現実を突き付ける事は出来なかった。
「……頑張っても、無駄なんだよ」
知も武も敵わぬ相手と戦って、どう勝利を得ろと言うのだ。
その言葉を言えない代わりにいつも通りの悪態を吐くとヴァースはシアの横をすり抜け出て行った。
今日彼女が何も持ってきていないという事は昨日の書類の回収に来ただけだろう。サインは済ませて机の上に置いてある。
「……ファウストフィート公……？」
だが言葉には感情が滲み出る。形にならないその微小な違和感に戸惑いシアはヴァースの背を見送って――はたと気がつき慌ててその後を追った。
「ファウストフィート公！　どこへ！」
「昼には戻る。……好きにさせろ」
きっぱりとした拒絶の眼でヴァースに見られ、シアは伸ばし掛けた手を硬直させた。そのまま背を向け去っていくヴァースを追い掛けられもしない。
（……どうして）
彼の身ごなしから判断して、シアはヴァースの実力をほぼ正確に把握していた。彼が剣術・魔術の両方を扱う事は知っているが、それでも十分勝てるという自負がある。
そしてそれは間違っていない。
だというのに。
（……追えなかった）
彼の道を阻む事が出来なかった。美しい、しかし異形の紫の瞳に射竦められた途端に。
「ファウストフィート公……？」
今までヴァースは好意的ではなかったものの拒絶してはいなかったのだと思い知る。
ただそれだけで他人を圧倒する彼の瞳は――真実、王の物なのかも

しれない。
（けれど本人があれじゃあ……いえ、本人がああだからこそ、私は今恐ろしいんだ）

2―2

（ヒルディアとシルギードか）

中央広場の噴水の縁に腰掛け脚を組み、ヴァースはこの面倒の発端となった二つの国の名を思い浮かべる。

竜王国ヒルディア――大陸最古の大国であり、竜が棲むと言われる三方の山に周囲を囲われた女王国家。代々の女王はドラゴンマスターと呼ばれ山々に棲む何百という竜を操る事が出来るという。その力で太古の昔は大陸を制覇したとかいう歴史書もあるが、流石に眉唾だろう。現在は若干十三歳の少女が女王として君臨している。そして専制君主国家であるシルギード。山脈と草原からなる広大な地帯を根城にしていた多数の異民族達を平定して作られた多民族国家。現在は狂王と呼ばれる男が主として立ち、支配下に置かれた民族の多くに容赦のない圧政を敷いているという。

どちらに付くか、と二択しかなくなれば。

（……ヒルディアだろ）

町の人間が愛する『自由』が商売以外でどこまで残されるかは判らないが、まだヒルディアに組み込まれた方が安全だろう。

（今のうちにヒルディアに従った方が良いんじゃねえのか）

シアも市民達も望まないだろう。しかしどちらにしろいずれ戦禍に巻き込まれるのならばさっさと準備をして逃げておいた方がいいと思うのだ。

国境の町等というものが、いつまでも平和な訳はない。

被害を少なくするために――

「って！」

はたと考えるのを止めヴァースは頭を振る。何故こんな事を真面目に考えているのだ。

（だからっ。俺には関係ねーんだよッ）

シアや町の人間が決めた事に諾々と従ってやっていればいい。救

いたい奴だけ頑張っていればいい。
（クソ……ッ）
苛々と言う事を聞かない自分の思考に舌打ちをして頭を乱暴に掻く。
「――……何やってんだ。俺は」
昨日の今日でこんな所をフラフラと、いや、リンデンバウムはあのセリフからすればすぐにでも来るという事はないだろうが。
溜息をつき目線を何を見るでもなく遠くへと向けて――見覚えのある赤髪にはっとして身を乗り出す。
「イシュタル！」
「！」
名前を呼ばれ、明らかに驚いた様子でイシュタルは足を止めて振り向いて――ヴァースを認めると曖昧に笑ったような表情をする。
「ファウストフィート公」
「……まだうろうろしてたのか」
「まぁ。……驚きました。いつ判ったんです」
最初の驚きが去ると軽く目を細めて余裕を取り戻してからそう訊ねて来た。
「昨日だ。――リンデンバウムって知ってるか」
「――リンデンバウム、が」
「あァ。お陰で助かったぜ」
さらりと髪を掻き上げ耳のカフスと見せるとイシュタルはへえと感心した声を上げる。
「そうですか。それは良かった。――まさかリンデンバウムが来て更に生き残るとは思ってませんでしたけど。……そんな感じしないんですけどそこまで手練れなんですか？」
「テメェ失礼な事さらっと言ってくれんな」
昨日イシュタルはヴァースを評して『腕が立つ』と言ったがそれはあくまでも『一般の中で』という括りでの正確な評価だったらしい。

流石、軍師一族の名を冠するだけの事はあるという事か。戦力を見極める目は確からしい。
「……けど。リンデンバウムがどうしてファウストフィート公を……」
「ヒルディアだかシルギードだかにシェアディールが付いたからだろ。本人もそう言ってたんだから」
「まさか！　例えどっちがカラムを手にしたとしたってそれじゃあ確実に争いが起こる。姉上がそんな事をするはずがない！　付くんだったらカラムのはずだ」
　屈辱だとでも言いたげにイシュタルは眉を吊り上げきっぱりと否定してきた。盲目な程に。
「実際来てるんだから『はずはない』とは言えねえだろ」
「そ、れは」
　イシュタルの名前は、少し頑張れば調べられるだろうがリンデンバウムの名前が表に出る事はまず無い。
ヴァースがその名前に辿り着くには、やはりリンデンバウム自らが名乗るしかないだろう。
（けど、まさか……そんなはずは。それとも俺が見えていないだけなのか？）
　軍師一族などと言う血生臭い名前を背負ってはいるが、彼等には彼等の誇りがある。
シェアディールの知は理不尽な暴力に抗う術を持たない弱き民の為に存在する。だから決して、後に戦が起こったり民に苦行を強いるような策を取る事は無い。それを避けるための一族なのだから。
――だというのに、今イシュタルには当主である姉のやろうとしている事が見えなかった。
（今カラムがファウストフィートを失えば戦になる。大陸の抑止力としてのカラムの意味はとても大きい。なのに、何故……）
「イシュタル？」
「！」

ヴァースに呼び掛けられ、物思いから戻されてはっと顔を上げる。
「な――何でもありません。それより用はそれだけですか？　なら……」
「あぁ。――……い、や」
一回頷いてからヴァースは少し躊躇った後首を横に振った。
「一つ聞きたいんだが」
「カラムが生き残る方法ですか」
「……そうだ」
イシュタルにしてみればヴァースが問いかけて来るのに何の不思議もない質問。だがヴァース本人にとっては些か葛藤のある質問だった。
イシュタルの方もまだ先の事が後を引いていて気が付かれはしなかったが。
「一番はっきりしているのは貴方が死なない事です。ファウストフィートが生きてる限り手は出せない。後は結婚に注意すぐぐらいですかね。――でも……」
（姉上が動いてるんじゃ、そんな生温いままで済ませる訳がない）
「守ってるだけじゃ近い内に俺は殺られる」
結局一流の腕前を持つ者達に襲われれば、生き残るのは難しい。ヴァースが冷静に己の位置を見ているのに、イシュタルは少し驚いた。
「……俺がこの町に留まっている理由を聞いた時、貴方は昨日『必死だから』と答えました。現実に命が脅かされて尚、変わりませんか」
「そんなの就任前から判ってるだろうが」
「それはそうですが」
だが判っているだけの時と、実際に命の危機に晒された後では訳が違う。特にヴァースは今まで戦とも政治とも無関係な一般人だったのだ。覚悟が出来ているはずがない。
なのに。

「人の為に、命を掛けられるんですか。大義の為に？」
「……そんな綺麗なもんじゃねえ」
（無気力なだけだ。他人どころか、自分にまで）
微かに眼を曇らせたヴァースをしばし見詰めて――イシュタルはこくん、と頷いた。
「判った。俺が力を貸してやるよ、ファウストフィート公」
「――は？」
「俺がカラムに付いてやる。姉上が何を考えているか判るまで、だろうけどな」
イシュタルは姉が間違った判断をしているとは思っていない。当主の座を継いだ姉は、自分などよりも遥かに優秀で、強くて、正しい人だから。
だから間違っているなどとは絶対に思わないが――どうしても、今自分が納得出来なかった。
（中枢に入れば、俺にも視えるかも知れない）
現場にいれば姉の行動に納得できる何かがちゃんとあるのだ。それまで少し、カラムに時間を与えるぐらい許されるだろう。
「って……お前、いいのか」
「さっきも言ったろ。シェアディールが付くならカラムのはずだ。少なくとも俺ならそうする。だから理由が判るまでの間だけ」
「お前が信じる通りなら、お前の姉の策に乗ればカラムは助かる事になるんだろ。――俺が、死ねば」
「……」
例えファウストフィートを消すにしたって、ヴァースを退任ではなく、殺さなくてはならない理由……
（やっぱり、俺には判らない）
「それが一番だと思ったら、俺もそうする。けど今の俺には判らない。だから今はカラムに付く」
「――判った。頼む」
どちらにしろ盾になった段階でヴァースの命は長くなど無い。

（別に俺がカラムを守りたい訳じゃねえ）
だがシア達がカラムを守る為には――シェアディールの知があれば、きっと。
「じゃ、城に戻るか、ヴァース・ファウストフィート。あ、俺達との契約条件って衣食住と身の安全の保証だから。ま、カラムには『身の安全』はあんま期待しないけどそれなりには宜しくな」
「まあ、そりゃ多分俺と同じぐらいには――って、お前さっきから敬語取れてるぞ」
別に何としてでも敬語を使えという訳ではないが随分な変わりようだ。どちらかと言えば馴れ馴れしいし表情もどこか人を食った生意気なものになっている。おそらくこちらがイシュタルの素なのだろう。
「一般市民としちゃ領主のファウストフィート公には敬語使うけど、シェアディールの知が欲しいなら立場は対等だぜ、ヴァース。って事でよろしく」

2―3

「ふーはー。近くで見るとやっぱ凄いなぁ。カラムの財力の豊かさを感じるよなぁ」
ヴァースと共に城へと戻ってイシュタルは感心した口調でそう評価した。芸術性を優先した荘厳な城の造りはヒルディアやシルギードの王城と比べても遜色なく美しい。勿論規模まで、という訳にはいかないが。
外観だけでは無い。内装も手を抜かれておらず、それだけで一見の価値がある。
「でも所々趣味の悪いのがあるな」
「……あれは親父と兄貴の趣味だ」
その時ヴァースはまだ幼かったが父や兄がカラムの財力を使って片っ端から色々な物を購入しているのは知っていた。
とかく派手な物が好きで、それそのものが悪い訳ではないのだが並べられると趣味が悪く見える。センスの問題だろう。
「へえ。地位と品性ってのは比例しないもんだね。どれも悪い物じゃないのに勿体ない」
その通りだとは思うし血は繋がっていないとはいえ、人の家族を捕まえて随分な言いようだ。
……『家族』とは――言えないのだろうが。ヴァースとしても家族などとは思っていないのだし。
「――ファウストフィート公！　良かった、お帰りなさいませ」
どこかへ移動中だったのだろう、私室に戻る途中でばったり会ったシアからほっとしたように声を掛けられた。ヴァースの帰りがこう早いとは思っていなかったのだろう、表情が明らかにそれを言っている。
「……ええと。こちらの方は」
続いて見た事のない少年が一緒なのに気が付き戸惑った視線を向

けた。
カラムの人間では無い。――と思う。
見た事がないし、明らかな旅衣装は居住を持つ人間のそれでは無い。
という事は、シアから見るとヴァースが町で知り合い連れて来た、
という事になりそれは決して間違っていないのだが。
（……らしくない……）
ヴァースはカラムに出来る限り個人として付き合わないようにしている。シアの戸惑った視線を受け、ヴァース本人がどう言おうか、と迷っているうちにイシュタルが気さくに笑い掛けて来た。
「どうも初めまして。イシュタル・シェアディールだ。ヴァースに頼まれてカラムを守る手伝いをする事になったんで、以後よろしく」
「おいっ」
シェアディールの名前は伏せてた方が安全じゃないかとか色々考えていたのに、あっさりイシュタル自ら名乗ってしまった。
（――大体っ）
「俺がいつ頼んだ！　お前が気になったらからって言って来たんだろうが！」
「まあそれが第一だけど。『頼む』って言った。ヴァースも確かに『頼む』って言った」
「――っ」
言った。確かに言ったが――
「ファウストフィート公……？」
シアの声には露骨に驚きが滲み出ていた。
「――……貴方、が？」
「――っ。流れだ！　それから俺の為だッ」
お前等の為じゃない。町の為ではないと声を荒げてヴァースは否定するが動揺は全く隠せていない。
「何お前以外と照れ屋さん？　自分の命賭けて大した所縁がある訳でもない町をその住人が『頑張ってるから』なんて理由で守ってんだ。今更照れるような事じゃないだろ？」

「だ――からっ。違……っ」
そんな風に掻い摘んで言われると、もの凄く立派な人みたいだろう！
（そんなんじゃねえっ）
自分の中にあるのはそんな立派なものじゃない。無気力なのと――リンデンバウムに殺されるのは苦しいだろうから遠慮したいという、それだけだ。
「……ファウストフィート公」
（……知らなかった）
しくり、とシアは自分の胸が痛むのを感じた。
別にヴァースに不満は無かった。イシュタルの言う通り、ヴァースにとっては殆ど所縁の無い場所なのだから。
（居てくれるだけで充分だ、なんて）
何故居てくれるのかすら、見てもいなかったのに。
自分の命が然程惜しくないとか、それもきっと嘘じゃない。嘘じゃないだろうが――
それでここに居てくれた理由が、そんな事だったなんて。
ヴァースにとってはさしたる事ではないのだろう。
たまたま出来る事が目の前に転がっていたから、やった。きっとただそれだけの事で。
「――……ヴァース様」
「あ？」
「すみませんでした。そして――有難うございます」
そうシアは頭を下げ、初めて『ファウストフィート』の名前ではなくヴァース本人へと礼を告げた。
「止めろ。……んなんじゃねえ」
「まァいいじゃんいいじゃん。人の好意は貰っとくもんだ。お前がどう思ってても彼女はそれに感謝してる。それに実際町の為にもなる。悪い事なんて何も無いだろ？」
そう言って笑ったイシュタルの方が嬉しそうで、ヴァース本人は

首を傾げる。
「で、彼女は？」
促され、ようやくシアはイシュタルに名乗っていないのに気が付き頭を下げる。
「シア・ミディアラです。カラムの庶務全般を預かっています」
「そっか。じゃ、あんたにも来てもらった方が良いかな」
「？　どこにです？」
首を傾げるシアに代わってヴァースの方が頷いた。
「そうしてくれ。俺は政治にも何にも本当に関わってないから」
出来るならシアとイシュタルで話を進めて行って欲しいぐらいである。イシュタルに話を振った手前流石にそれはやらないが。
「忙しい？」
シアが腕に抱えたそれなりの量の書類を見てイシュタルはそう尋ねてみる。
「いえ、ご用が御有りでしたらそちらから伺いますが」
「ん、長くなるだろうからこっちが後でいい。纏まった時間が取れたらヴァースの部屋に来てくれ」
「判りました」
「じゃ。――行こう、ヴァース」
「ああ」
シアと別れ、後は擦れ違う人に会釈されるだけで三階の私室へ辿り着く。
「適当に座ってくれ」
「あぁ。――敵意じゃないけど一歩引かれてる感じだな。ま、ヴァースの容姿は綺麗だしちょっと委縮してんだろーな」
「とっつきづらいだけだろ」
そうして来たのがヴァースなのだから当然だ。だがくくと笑ってイシュタルはヴァースを指差した。
「お前は見栄えするよ、ヴァース。どこに出しても人目を引く気品がある。これは上に立つ者には重要なファクターだぞ」

「……そりゃ悪いよりゃいい方が良いだろうが」
そこまで言われると恥ずかしい。
――まあ、確かに義理の父や兄には女だったら、という事は散々言われた。その度に男に生まれた事に感謝したものだ。

2―4

「それで、これからどうするんだ」
自分の事はもういいとヴァースは先の事を尋ねて話題を変える。
「そうだな。まずは姉上がどこに付いてるのかを正確に知りたいな」
おそらくヒルディアだろうと思うのだが、カラムに付くはずだという予想を違えたばかりなので確かめてみないと言えなかった。
「それからなるべく早くヒルディアに行こう」
「ヒルディアに？」
「シルギードの傘下に入る気にはなれないだろ？　大体今のシルギードに聞く耳なんか無いし」
それはそうだとヴァースも思う。どちらかを選ぶというならヒルディアにするつもりだった。
だが――
「つまり自治は無理って事か？」
「まさか。カラムは『自由都市』だから価値がある、だろ？」
「けどヒルディアに行くんだろ？」
「そう。行くだけ。んで女王リエンと会って話して来る。それだけ」
「――は、ァ？」
確かに他の国の王と領主が会ってはならない決まりは無い。政治的、軍事的な話をする訳でもなければそれの干渉とは言わないだろうが。
「何かあったらヒルディアに付くぞ、っていう対外に対するアピールな」
「……成程」
ヴァースだけのみならず、今度はヒルディアをカラムそのものの盾として使う訳だ。
「でもそれだと喜び勇んでヒルディアから戦争仕掛けないか？　何かを起こせばカラムが自国に付くって判ったら」

「そう。だからヒルディア側にもそーゆーのは見せない」
付く気があるのかないのか、曖昧な所で濁すのだ。ただヴァースがこの状況でヒルディアを訪れる、それだけで十分意味がある。
「後――一番手っ取り早いのがお前が竜妃リエンを口説いてくる」
「……――はァ？」
にや、と人の悪い笑みを浮かべて言ったイシュタルにヴァースは驚愕の声を上げた。
「……今、なんつった」
「知らないのか？　リエンは美形の男が好きなんだよ。大丈夫お前顔綺麗だから。存分に使って取り入って来い」
「ふふふっ、ふざけんなっ！」
自分を身売りするような真似も勿論だが、それ以上にヴァースの倫理観が許さない。
「ヒルディアの女王は十三歳のガキだろうがっ！　そんな相手に何しろっつーんだ！」
「ナニまで出来りゃそりゃ完璧だな。そこまで気に入られりゃ間違いなく色々保証してくれる」
「真面目に考えろ少しは！」
「大真面目だ」
イシュタルの口調から話半分、冗談半分だと思っていたのだが、反して返って来たのは至極真面目な一言だった。
「別に体使えって訳じゃないが、リエンに認めさせる事は重要だ。――カラムが旨みを持った町に成長してからどれだけ経った。何故今まで食い物にされなかったと思ってる」
「何――って、条約があるからだろ」
目を瞬き、何を当然の事をとそう言ったヴァースにイシュタルは首を横に振る。
「違う。国同士の関係なんてそんな優しいもんじゃないぜ。大体その条件だけなら今だって何も変わってないだろ」
「そりゃそうだが……国力の問題とかか？」

元々のカラムの出来た理由だ。これは間違っていない。
「それもあるがそれだけじゃない。――そうだな。じゃあむしろ何で『今』なのかと言い換えた方が良いかな」
「今……」
「それはな、ヴァース。ファウストフィート公が変わったからだ」
「――？」
年を経れば代は替わる。それは当然の事だ。
それが理由だというならどうやっても避けられない事になるではないか。
「人が、じゃない。有り様が、だ。カラムは確かに条約に守られた都市だけど、それを守らせて来たのはファウストフィートだ。抜け道なんか突こうとすれば幾らでもあるんだから」
「……」
「今の代になってヒルディアとシルギードは動き出した。そしてファウストフィートは逃げてしまった」
二国の王の眼は正しかったと言える。今のファウストフィートには町を守る力どころか気概すらないと。
「すぐにでも動いてこないのはお前を見ているからだ。お前がどこまで出来る奴なのか」
「――……俺は」
そんな事、気にした事も無かった。元々ヴァースにカラムを守るつもりは無かったので当然だが――外から見ればそうなるだろう。
「……俺にだってそんな力はねえ」
「謀だけが領主じゃない。勿論出来るに越した事は無いけどそれより必要なのは人を信じさせる力だ。ついて行ってみようって、そう思わせる力。ヴァース、お前はその条件を満たしてる」
「……んな事、ねえだろ」
信じてどうする。自分などを。
「お前がそれを口にしちゃいけないんだよ、ヴァース・ファウストフィート。だって俺がこうしてカラムにいるだろ。お前にそんな事

言われたらシアだって、町の人間だってどうすりゃいいか判らなくなる」
「んな事ねェ！　俺はお前が思ってる程献身的な訳じゃない。ファウストフィートの座に居るのだってお前に声掛けたのだって誠心誠意町を守ろうとしてって訳じゃねェ！　そんな事シアだって町の人間だって判ってる！　俺が果たしてやんのは『盾』としての役割だけだ！」
一息に怒鳴ってはぁ、と息を付く。
怒るかもしれない、と思った。イシュタルが自分を聖人君子の様に見ていたなら裏切られた気分になるだろう。
だがイシュタルから返って来たのはごく冷静な言葉だった。
「そんな事判ってる。それで当たり前なんだ、ヴァース。人は厄介事なんて嫌がるものだから」
「だったら」
「でもお前はここに立ってる。町の人間達が一生懸命だからって、それだけの理由で個人を晒して命を掛けてる。リンデンバウムに言われたからかもしれないけど、それでもお前は俺に声を掛けたんだ」
「――……」
「力になってやろうって思ったんだろ」
ヴァースを見詰めるイシュタルの眼には優しい色が映っていた。敬意と憧れ、そんなような物に近い。
「シアはそれが嬉しかったんだ。城の人間だって同じだよ。ファウストフィートの名前じゃない。その名を持ってその場に立ってるヴァースへの好意だ」
「……っ……」

2―5

「――ヴァース、俺な、まだシェアディールじゃないんだ」
「？」
自分を嘲るように、情けない笑みを顔に張り付けてイシュタルはそう言った。
「最終試験、怖くなって逃げてきたんだ。一族から。人の命を預かるのが怖くて逃げたんだ。軍神なんて名前付けられて、期待されるのが怖かった」
（リンデンバウムがこいつを探してた理由はそれか……）
試験最中に逃げ出した事がシェアディールとしてどの程度責められる物なのかヴァースには想像つかないが、少なくともリンデンバウムが望んでいるのはイシュタルが咎を受ける事ではないだろう。イシュタルの安否を気遣った時にだけ見せた表情はおそらく本当のものだったから。
そしておそらく、当主だという姉も。血縁ならば飛び出して行方知れずになった弟がさぞかし心配だろう。
「笑えるよな。その為の知識も技術も、覚悟だって教わって来たのに肝心なものが何にも身に付いていなかったんだ」
「覚悟、か？」
それなら自分にだって無い。そう訊ねたヴァースにイシュタルは首を振って自分の胸を指す。
「心が」
「心？」
「シェアディールの知は理不尽な支配者に抗う術を持たない民の為にある。それは人が人を助けたいっていう、ちょっとした善意から生まれるものだ。――俺は自分の恐怖でそれを忘れて逃げたんだ。それをする為の全てを教わってたのに」
そしてもう自分には無理だとも思っていた。姉がもう継いでいる

んだから良いじゃないかとも思っていた。
（――そんな事じゃなかったのに）
そして逃げて、偶然立ち寄った町に知も力も術もないまま、それでも自分の命を晒して町と人とを守っている領主を知った。知も力も覚悟すらなくて、それでもほんの少しの善意で人の為に立ち上がっているひと。
何も持っていないのに、ほんの少しの善意の為に逃げなかったひと。
「お前のお陰で思い出した」
子供の頃、勉強の全てが好きだった。
自分達の力で本当に戦争を無くして行こうと三人で夢を笑って話し合った。
「だからカラムに力を貸そうと思ったんだ。――何よりも、お前の為に」
「って、殺すかも知れない相手に言うセリフじゃねェぞ」
「そうだな。――全くだよ」
だが本当に必要であるならば、シェアディールの誇りの為にイシュタルはやるつもりだった。個人の感情で全体を見失ってはいけないのだ。
「でもそれは最後だ。本当にどうしようもない以外は――俺は必ずお前を助けて見せる」
それほど真摯な思いを向けられても、応える事など出来ないというのに。言葉に詰まったヴァースを助けるように、静かに二回扉がノックされた。シアだ。
「ヴァース様、宜しいですか？」
「あ、あぁ！　大丈夫だ」
「失礼します」
妙に勢いが付いてしまったが、扉を開けて入って来たシアは然程気に止めていないようでほっとする。
「時間、もういいか？」
シアが訪れたという事はそうなのだろうと思いつつ、一応イシュ

タルはそう確認してみる。しかしシアから返って来たのは肯定では無く戸惑ったような表情。
「いえ、あの……シルギードから使者の方がいらっしゃってるんですが。ヴァース様に会いたいと。……お会いして頂いて宜しいですか？」
シアとしてはあまりヴァースに負担はかけたくないのだが、相手方がヴァースを望んでいる以上無視するのは蔑ろにしている事になってしまう。対外的にも良くない。
「……仕方ねえだろ。行――」
「冗談。ふざけるなって言って追い返せ」
『はぁ？』
きっぱりと言い放ったイシュタルにヴァースとシアは揃ってぎょっとした声を上げた。
「そ、そんな喧嘩を売る様な真似、出来る訳が」
「……お前等本っ当政略向かねーわ。いいから今日は追い返せ。絶対大丈夫だから。三日後ぐらいに出直してこいって言ってやれ」
「け、けど……」
シアは躊躇ったまま頷けない。
シェアディールだと名乗ってはいてもそもそもそれを証明するものなど何も無いのだ。会ったばかりのイシュタルを信用しろと言う方が無理がある。
「ヴァース」
イシュタルとてシアの心理は良く判る。だからこそ、その主であるヴァースに決断を求めた。
「……っ」
イシュタルから促され、ヴァースは小さく息を飲む。決定権を持つのは自分なのだ。
――イシュタルを連れて来たのは自分だ。
そして実際自分やシアよりは余程上手くやってくれるだろう。
「判った。シア、イシュタルに従ってくれ」

「――……判りました」
す、とヴァースに対して頭を下げ、それを伝えにだろう、シアは使者の元まで戻って行った。
「信じろ。大丈夫だから。軍神シェアディールの知の力、見せてやるからさ」
「俺がお前に声かけたんだ。お前の判断は信じる」
「あぁ、任せろ」
嬉しそうに笑って答えたイシュタルに、その知略への信用とは別問題でヴァースは心の内に不安が沈むのを感じていた。
（何をしてるんだ……俺は……）
一体自分は本当に、何をしているのだろう。
何の覚悟も、無いというのに。

第三章　軍師一族シェアディール

早朝、まだ目覚めたばかりでろくに身支度もしていない時間帯に規則正しいノックが聞こえた。
（珍しいな）
この時間帯、まだヴァースが活動していない事ぐらいシアもとうに知っているだろう。実際今までシアが訪れるのは昼間が殆どだった。それでも起きていない事がある程だ。
「ヴァース様、宜しいですか」
「いや――……、まあ、構わねぇけど……急ぎか？」
急ぎの用ならあえて拒もうとは思わないが、そうでなければ本当の寝起きは流石に勘弁してもらいたい。女性程には気にしないが、ヴァースとて他人の眼ぐらいは気にするのだ。
「……いえ、失礼しました。また後ほど覗います」
声の調子で悟ったのだろう、少し慌てたようにそう言うとぱたぱたと足音は遠ざかっていった。少しばかり乱れていたのは気のせいだろうか。
（何なんだ）
少し不可解な気はしたが――おそらく戸惑っているのだろうと結論付けた。
無理もない。
シルギードの使者に門前払いをくらわせた翌日だ。相手の反応が気になって落ち着かないのだろう。それを指示した本人はその後何の説明もなく城を見回って何やら調べた後町に出て、戻って来たと思ったら寝てしまった。
（……人の事言えねえが、マイペースに過ぎんだろ）
しかし自分で動かしてしまった事態だ。もうヴァースが第三者でいる訳にはいかない。
いつもならもう少しベッドの上でぐずぐずしているのだが、起き上

がって身支度を整え表に出る。
先にシアを探すかイシュタルに会うか――
（……イシュタルにするか）
ついさっき追い返したばかりの相手を呼び止めるのもどうかと思うし、既に彼女の事だから別の仕事に取り掛かっている事だろう。何よりイシュタルの部屋はすぐ近くなので探さなくて済む。
「――イシュタル？」
軽くノックして呼び掛けてみるが――無反応。
「イシュタル？　いないのか？」
再度の呼びかけにも反応が無く、ヴァースはそこで諦めた。
（まァ、色々やる事もあるのかも知れねえし、後でまた来てみるか）
しかしそうなるとやるべき事はそれで終わってしまうのである。後はせいぜい再度シアが来た時に空振りにならないように部屋で待機しておくぐらいか。
息を付いて自室に戻ると、横から伸びてきた手にぐっと口を塞がれくつくつと耳元で笑い声がした。
「元気みたいで何よりだ」
「っ」
きん、と耳鳴りのような音がして、不快さに顔をしかめると同時に解放された。騒いでも別に構わない、という事だ。
「結界か……」
「戻ってくるかどうか判らなかったからな。――うん、傷痕も綺麗に消えたな。残さないように気をつけてはいたが心配だったんだ」
満足そうに頷き、リンデンバウムは凶悪に笑う。壊す瞬間まで綺麗に保存しておきたいらしい。
「……何の用だ。殺りに来た、って感じじゃねえな」
「あぁ、まだ足りないな。今日はちょっと確認しに来ただけだ」
「確認？」
「ちゃんとイシュタルを引き込んだじゃないか。結構結構」
声に喜色を表し、馬鹿にしたようなその言い様にヴァースは盛大

に舌打ちをした。
「これで俺も心置きなく帰れるってもんだ。――ヒルディアで待ってるぞ。そこでゆっくり殺させてくれ」
「シェアディールが付いてんのは、ヒルディアなんだな」
ヴァースが確認するように言った言葉にリンデンバウムは一瞬沈黙し――笑いだした。とても嬉しそうな狂笑を。
「はっははははは……ッ。自分の身よりも国事を気にするか。楽しみだよヴァース。それでこそだ」
うっとりとした仕草で気に入っているらしいヴァースの髪を梳くと、指を弾いて結界を消す。
「じゃあな。――早く来いよ。楽しみにしている」
ニィと最後に毒々しい笑みをヴァースに向け、リンデンバウムは窓から消えた。
追う気は無い。追った所で見付かるはずもないし、自分の実力では殺されるだけだ。
「……テメーが言ったんだろうが」
カラムを守るには――ヴァースがリンデンバウムに殺されないよう生き残るには、それしかないと。
(――……ヒルディア、か)
イシュタルの策でも近いうちに行かねばならない地。
(俺を殺して、シェアディールはどうする気なんだ)
そう考えてしまって、諦めたようにヴァースは首を振る。同じくシェアディールの知を持つイシュタルが判らないものが、自分に判る筈がない。
(とりあえず今は……どう時間を潰すか、だな)

次にシアが訪れたのは昼を回って少しした頃だった。来る前に声を掛けたのだろう、イシュタルも一緒だ。それはいい。

それはいいのだが、気になるのは――
「……お前、もしかして今の今まで寝てたのか」
「……う？　……あー……、うん、寝てた……」
まだぼやっとしたまま起きてるのかどうだか怪しい返事が返って来る。
「……ヴァース様……」
何だかもの凄く不安そうな顔でシアに助けを求められた。――気持ちは判る。
「おい、イシュタル。起きろ。結局昨日何も聞いてないんだよ」
「平気だってー……任せとけ任せとけ」
「とりあえず今のお前には何も任せられねーよ。顔洗って来い！」
「洗ったー……」
「冷水でだ！」
いっそ氷水で洗わせてやりたい。思い付いたら実行したくなった。
「シア、水」
「はい」
是非にという思いがあったのだろう、シアはてきぱきと水を洗面器に入れて戻って来た。そこに魔術で生んだ氷を入れ、十分に冷えたのを確認してからまた椅子に座って眠りそうだったイシュタルの頭を突っ込んだ。
「――ッ！」
流石に目も醒め、がぼっ、という水に気泡が溢れる音がして苦しげにもがき出す。
「起きたか？」
「『起きたか？』じゃないだろ！　何するんだ！　俺の心臓が弱かったら今頃あの世だぞ！」
「こんな時間まで起きてない方がおかしいだろうが！　昨夜何やってたんだ！」
イシュタルが部屋に戻ったのはそう遅い時間ではなかったはずだ。イシュタルの抗議に同じく怒鳴って返すと、曖昧な音を口から出し

て後ろ頭を掻く。
「いや、まあ、色々。ここ色んな書籍あるしつい」
「ったく……まあいい。眼ェ覚めたなら話始めるぞ」
どかりとヴァースがソファに座り、机を挟んだその正面にシアとイシュタルが座った。

3―2

「結局昨日シルギードの方はお帰りになりましたし今日も何もありませんでしたけど、大丈夫なんですか？」
「ああ、大丈夫大丈夫。上手く立ち回ればカラムの立場は別に今すぐ弱気になるようなもんじゃないぜ。下手に下手に出る方がどんどん立場悪くする。昨日見て回ったけどすぐに金として出せる貯蓄だけでも結構あるな？」
　昨日の内にカラムの内政は把握して来たらしい。
ヴァースは今の今まで気にもしていなかったがイシュタルの言葉は少し意外だった。何というか、もっと使い込まれている印象があったので。
「はい。不必要な嗜好品については城内の者も苦心して止めてきましたので。――それでも大分使い込まれてしまいましたけど」
　義理とは言え父である。ヴァースの手前あまり悪く言いたくはないがどうしても声と顔に苦いものが混ざってしまう。実際の所ヴァース本人は全く気にしていなかったが。
「十分十分。つまりだ――ヒルディアとシルギードの間で戦争が起こった場合、カラムが付いた方が物質的に余裕が出来る。今の状況ならこっちが強気に出りゃ向こうも強くは言えないぜ」
「そうか。機嫌損ねて敵側に付かれちゃたまんねーもんな」
「そういう事。対等以上の振る舞いしたって大丈夫だよ。しないけどな」
　カラムが自治を守るなら、周辺諸国との関係は考えなくてはならない。ただし『対等』は強調させてもらった――という訳だ。アポイント無しで他国の王との謁見など適うはずがない。
「……じゃあやっぱり、会う事は会うんだな……」
「心配するなって。言ったろ、お前は見栄えする。舐められる事は無いさ。な、シア」

「え――ええ、そう、ですね」
微かに頬を染め、ヴァースからやや視線を外しながらシアは頷く。
「やっぱりシルギードに付けって言われるのか？」
「それは無いな。今それやると条約違反だから。それに、シルギードは自分達が不利なのをよく知ってる。二者択一なら誰だってヒルディアを取るってな」
それが判っていて相手に選ばせるような真似をする者はいないだろう。
となれば当然、行動としては協力させるか、支配するかになる。
「昨日調べてみたが、シルギード内に特に目立った動きは無い。あんまり深い所まで探る手は持ってないし……どう言い掛かりを付けてくるかは正直その場になってみないと判らない。ま、向こうの態度からしてもこっちを舐めてるみたいだし大した用意はしてないと思うけどな」
「じゃあ使者との謁見が済んだらヒルディアへ、か？」
「そうなる」
「ヒルディアへ？　ヴァース様、まさか」
ファウストフィートの名前でヴァースがカラムを渡してしまえば本当にそれで終わりだ。
「いや、自治都市は売らない。リエンに会ってくるだけだ」
「そういう意味じゃシルギードの使者が来たのは丁度良かったかもな。話漏らさないようにしないと」
リエンに会うのがシルギードへの牽制になるのと同じだ。シルギード国内に入るのを忌避していたイシュタルにとっては好都合。
「……そうだ。さっき、リンデンバウムに会った」
「っ」
息を飲み、微かにイシュタルは表情を強張らせた。その横でシアが首を傾げる。
「どなたですか？」
「この前俺を殺しに来た奴だ。それで、シェアディールの護り樹」

「な！　――……っ、ご無事、だったんですね……」
（……あ）
少しまずかったかとシアの表情にヴァースは後悔した。ヴァースが襲撃されているのに気が付かなかった事を彼女は気にしていたのだ。忘れていた。
「今日は殺気も無かったしな」
大した慰めにもならないだろうが、ヴァースは一応そう言っておく。小さくはいと答えてシアは唇を噛み締めた。
「リンデンバウムは何て」
「ヒルディアで待つ――ってさ。とりあえずお前の姉貴がヒルディアに居る事ははっきりした訳だ」
「え、待――待って下さい。シェアディール殿の姉君なら」
シェアディールがヒルギィア、シルギードのどちらかに付いたという話自体ヴァースはシアにしていなかった。いきなり聞かされた方としてはうろたえて当然だ。
「あ、名前の方で呼んでくれ。まだシェアディールって名乗りたくないから。そう、俺の姉上――シェアディールの当主はそっちだ」
流石にシェアディールの資格を持っていない、とまでは今の状況でシアには言えないのでその辺りは適当に濁す。
「そうか……でも、ヒルディアか」
シルギードに付くよりは納得できるが、やはりまだ判らない。
（何にしろ俺もヴァースとヒルディアには行くんだ。その時姉上に会ってみればいい……）
勝手に逃げだした自分を姉は怒っているかもしれない。気分は重いが避けては通れない道。
もう一度、シェアディールとして立とうと決めたのだから。
「カラムは……自治を守れるのでしょうか」
「守れるさ」
今まで自分に言い聞かせる事で奮い立たせてきた肯定の言葉を他人から――しかもあっさりと言っていい程の口調で返って来て、シ

アははっと顔を上げる。
「カラムが自治を守る事がこの大陸にとって一番いい。少なくとも、今は。だから――」
（きっと姉上だって同じはずだ）
自分は姉を信じている。自分より余程優秀で、強くて、間違えないシェアディールの当主を。
だからこその不安もある。ヴァースを殺す事になるかも知れない不安。
しかしそれは心の内に押し込めた。今のヴァースやシア――カラムの生命線を担う軍師として。
「とにかく事はシルギードの使者が来てからだな。そしてヒルディアに行ってからだ」

（クソ、堅っ苦しい……）
いつもは質はいいが比較的装飾の少ない服装をしているヴァースにとって、正装は少々肩が凝るものだった。
しかしこれは仕方がない。イシュタルもきっりとした士官の格好をしている。
「俺も嫌いだから判るけど、まずは見た目な」
「判ってるよ。何も言ってねえだろ」
「顔が言ってる」
笑いながら断言された。間違っていないので舌打ちをしてそれには答えない。
「基本あんま喋んなくていいから」
「判ってる。自分からボロ出そうとは思わねえ」
頷き、私室の窓から外を眺める。丁度使者が門を潜ったのを見てしまって憂鬱な思いで眉を寄せる。
「――ヴァース様」

ややあってからシアが部屋まで呼びに来た。案内し終えたのだろう。

「よし、行くか」

「ああ」

覚悟を決めて立ち上がり、応接室へと向かう。正装が余程珍しいのか、城内の人間にまで妙に視線を止められるのが鬱陶しい。しかしやる以上は出来る限りは演じるつもりだ。普段はあまり気に掛けない上品な足運びで応接間まで辿り着き、ノブに手を掛け――扉を開いた。

3―3

「これはこれは、ファウストフィート公――」
「お待たせいたしました。ヴァース・ファウストフィートです」
どこか慇懃な笑みを浮かべながら立ち上がって会釈をしようとした使者二人だったが、薄く微笑し、名を名乗ったヴァースを見た途端静止した。
幼い頃公爵家に来た時からきっちり礼儀作法も叩き込まれている。はっきり言って嫌いだったが、今は学んでおいて良かったと切実に思う。
（……想像以上だな）
ほうと心の中でだけイシュタルは称賛の溜息を吐く。
声の抑揚の付け方、佇まい、表情――どれを取っても申し分ない。これが幼い頃かじっただけの人間の纏う雰囲気か。
おそらく彼には天性のものがあるのだろう。
（ヴァースは頭も悪くない。これで学んで本気になれば――）
ぞくぞくと歓喜に近い感覚がイシュタルの背を駆ける。しかし今は目の前の事が第一だ。
「どうぞ。お掛け下さい」
「あ、ああ――はい。これは……どうも」
「……？」
ヴァース本人に自覚は無い。狼狽した様子のまま促されぎくしゃくと座った使者達に流石に怪訝な表情になる。慌ててすぐにそれも消したが。
傍目からそうと見えなくても内心はかなり必死に取り繕っているだけなのだ。
席に着き、互いに名を名乗るとイシュタルの名前に相手の表情が明らかに強張った。シェアディールの名前はそれだけで武器になるのだ。

その動揺に微笑したまま早速イシュタルは本題を切りだした。
「さて、互いにお見合いの為に席に着いた訳ではありませんし、本日はどのようなご用件で？」
「ええ、実は――先日当国に内通者がいる事が判明いたしまして。しかもこのカラムに逃げ込んだとの情報が入っているのです。都市への捜索部隊を入れる事を許可して頂きたい」
（内通者……）
本当かどうかはとにかくとして、それはまずいという事ぐらいはヴァースにも判る。カラムの公式な許可を得て入って来たシルギードの軍が国境ででもヒルディアと何かがあったら大問題だ。
イシュタルも勿論同じだろう、困ったような表情を造って小さく唸った。
「それは困りましたね。どんな形であれ軍人を入れるのは難しい。お判りでしょう」
「無論重々承知しております。しかしカラムにとっても他人事ではない話」
「と、言われますと？」
「どうやら奴等はファウストフィート殿の首を持ってヒルディアに向かう模様。我等は貴君とは良き関係を築きたいと思っているのですよ」
（ヒルディアに俺の首か）
おそらくそれは自作自演だろう。ヴァースの首を狙う者がいるのは確かなのだろうが、内通者などではないに違いない。
――だがヒルディアにしろシルギードにしろ、ヴァースの首が欲しいのに違いは無いのだ。つい最近ヒルディアから直接襲われた事を思うと冷笑が込み上げてくる。
何という茶番。
「カラムに正式な軍隊が無い以上、警備をするにも万全とは言えますまい。ファウストフィート公、貴殿の身を我等の手で守らせて頂きたい」

「成程、確かにそれは他人事という訳にはいきませんね。何しろ主の命が掛っている訳ですから」
「それでは」
「しかし先程も申し上げた通り、非常に難しい問題です」
薄く微笑し――イシュタルは続けてきっぱりと言い切った。
「お断り致します」
「な、何と――……。それでは貴君はファウストフィート公の命が失われてもいいと、そう仰るのですか！」
「そうは申しません」
「ただ己の命惜しさに民に無用な心労を掛けたくはありません。今この時に軍を受け入れる、それだけで多大な緊張を強いる事になってしまいますから」
イシュタルに自分の命を『どうでもいい』発言させる訳にはいかずさらりとヴァースはそう割り込んだ。受け入れない建前でも勿論ある。しかし何よりも本心だった。
「……ファウストフィート公……」
「貴国の事情も良く判ります。カラムの性質上町を封鎖――等という事は出来ませんが検問ぐらいでしたら引く事は可能です。こちらが御協力できる精一杯とご理解下さい」
しばらく使者はじっとイシュタルを見詰めて――頷いた。
「判りました。残念ではありますが……ご協力感謝いたします」
「ご理解頂けて何よりです」
「それでは我等は失礼致します。お忙しい中時間を下さり有難うございます」
「こちらこそ。道中お気を付けて」
去っていく使者を見送って――完全に姿が見えなくなってから、はぁとヴァースは大きく息をつきどっかとソファに座り直した。
「あー、息苦しかった」
「でも空気読むの上手かったじゃないか」
にぃと眼を細めたイシュタルがどことなく嬉しそうなのは気のせ

いだろうか。
「……流石に部下って事になってる奴に『領主の命はどうでもいいんで』とは言わせられないだろ」
「うん、助かった」
笑いながら頷いてイシュタルも大きく伸びをする。
「さて、あんまり時間が無くなってきたぞ。今日中に準備してさっさとヒルディアに向かわないとな」
「？　時間が無くなった？」
「シルギードもお前の暗殺に本気になったって事さ」
ヴァース・ファウストフィートと『良き関係』を築けなかった以上、シルギードにとってのヴァースは邪魔者でしかない。理解できる分、ヒルディア――というよりも姉が暗殺を仕掛けて来るよりもはるかにすっきり事実を受け入れられる。
「マジか……」
「シルギードは始めから交渉なんかする気は無かったって事だな。ま、いっそストレートでいい。シルギードの内部が本当の所どうだかは判らないが素早く制圧する準備が整ったらヴァースを暗殺するつもりだ」
「暗殺って……いやそっちは判るが、制圧？」
確かヒルディアもシルギードもまずはカラムの領主という座を得て、という形を取ろうとしていたはずだ。それが何故いきなり制圧などと話が飛ぶのか。
「暗殺の話が表で出されてきた以上乱暴な手段で来ると思っていい。ヴァースを殺したらその内通者を捕える名目でシルギードは押入って来る。力尽くでも来るだろうな。ヒルディアが反発して接触したらもう止まらないぜ。そっちのが早いのは確かだしな」
その場合、どちらがカラムを先に占領し金品を得るかで勝敗が変わる。
「それでも一応、名目は気にすんのか……」
「今押し入ったらカラムは即行ヒルディアに付く。軍隊が着くまで

には金品持ってヒルディアに逃げ込むのも難しくないし。けどヴァースが殺された直後に全権限を持ってカラムを動かせる奴はいないだろ？」
「あぁ……そうか」
「だから急いでヒルディアに行く。相手の準備が終わる前にな」
ここまで来たらシルギードとの戦をヒルディアとの盾にしてもいい。ヒルディアが自治を侵すようならシルギードに付く。だがシルギードがカラムを侵すようならヒルディアに付く。
（……バランスゲームだな）
しかしシルギードが焦っているのが気に掛かる。カラムの財力がヒルディアに付く事でシルギードに対する抑止力になるかどうか……
（けど今のカラムじゃ調べる手が無いし時間も無い。状況見ながらやるしかないんだ）
まだカラムで誰が信用置けるかもイシュタルは把握していない。シアなら大丈夫だろうが、彼女は交渉事や隠密といった事には向かないだろう。
ヒルディアとの交渉も長くはかけられない。シルギードが動き出す前に終わらせなくては――

3―4

「イシュタル？」
「え、あ。な――何だ」
「いや、俺がヒルディア行くとかって、バレても大丈夫なのか？」
何しろカラムの通行は基本的に自由。誰が入り込むにしてもこれ程楽な場所は無い。
すぐにでも襲ってきそうなイシュタルの物言いにヴァースは不安になってそう聞いた。自分の死による結果ではなくたって、制圧され、金品を奪われたら同じなのだ。
「それは大丈夫じゃないが心配無い。俺幻術得意だから。ヴァースは元々何もしてない領主だしシアがいりゃ何も問題ないだろう」
適当な人間をヴァースの替え玉にしてもばれはしない。念のためにイシュタルの替え玉も置いておいた方が良いだろう。
ヴァースがヒルディアに発ったとなればおそらく周辺に待機させてるであろう少数の制圧部隊が襲ってくるだろうが、動かなければ予定通りに行動するはずだ。強行手段を取られる方が余程困るのだ。
（名乗らない方が良かったか……いや、どっちにしろ俺の名前が狂王に伝わるのは使者がシルギードに帰った後だ。大丈夫――やってやる）
「出来る限り急ぎたい。明日からは強行軍になる。今日はゆっくり休んでくれ」
「……判った」
イシュタル自身はまだこれから準備が増えたのだろう、説明を終えると応接室を出て行った。
（俺も戻るか）
この堅っ苦しい服もさっさと脱ぎたい。立ち上がって扉のノブに手を伸ばした所で、先に廊下側から開かれた。
「あ――」

「シア」
「ヴァース様。お疲れ様でした」
「別に。――あぁ、そーだ。イシュタルから話されるだろうけど、明日からヒルディアに行って来る」
「ええ、その予定でしたね」
頷き、シアは躊躇った様に口を閉ざし――ややあってから言葉を続ける。
「――私は」
「カラムに残ってもらう。判ってんだろ」
「い――いえ、でも」
シアが一番気に掛けているのはカラムだ。イシュタルとてシアにはカラムに残ってもらわなくては困ると言うだろう。
しかしシアにはヴァースをカラムに連れて来たという責任感が心の中にある。ましてヒルディアにはヴァースの命を狙っている輩が間違いなく存在するのだ。
「言ってんだろ。女に守られる程弱くねェ。お前が守りたいのはカラムだろうが。本体無くしてどうすんだ」
「――……はい」
カラムを守る為にヴァースを巻き込んだ。ヴァースを守る為にカラムを捨てる事はシアには出来ないし、してもいけない。
「申し訳ありません。――お気を付けて」
悔恨の想いのまま、唇を噛み締めるだけで気持ちを抑え頭を下げた。
「あぁ。しばらく空ける。じゃあな」
自分の横を過ぎ去っていくヴァースを見送って、シアは動き出した事態に不安な息をついた。
（何がどうなっていくのか、私には判らない）
自分の手のなんと小さな事だろう。一度動き出してしまえば流れも見えずに流されるだけ。
それでもコントロールしようとするイシュタルの視野にすでにシア

は感服してた。名前に対する期待。それはイシュタルが恐れた通りの民の姿。
そしてそれこそが軍神シェアディールの存在意義。
（私が守りたいのはカラム……。守らなくてはならないのはヴァース様……。この中で本当に守りきれるのか……。いえ、守らなくちゃならない。私が動いたのだから）
ふるりと首を振って足を引っ張る不安を振り払うと、シアは来たついでにテーブルの上に置かれたままのカップを片付け応接室を後にした。

ヴァースとイシュタルがカラムを出た数日後、本来なら急いでも一週間強は掛かるヒルディア王都までの道程をリンデンバウムは半分程の時間で辿り着いた。途中馬を何頭か潰しての強行の結果である。
ふわりと馬から降り立ってヒルディア城内の敷地に入ると、月光の下に女の影が伸びていた。
「遅かったじゃないかリンデンバウム。しかも一人で帰還とは。遊びに夢中で私の命を忘れたのか？」
顎をしゃくった居丈高な女の物言い。彼女の面立ちはイシュタルによく似ていた。
「カラムの領主はどうした？」
「まだ生きてる」
「……どういう風の吹き回しだ？　まあ別に構わないけどな。一応聞くが、イシュタルはいなかったんだな？」
本気でリンデンバウムが自分の命を忘れる等とは彼女は思っていなかった。リンデンバウムはシェアディールの当主――オシリス・シェアディールの護り樹だからだ。
ヴァースの命は何としてでもという訳では無かったから、別段見逃

してきた事へも然程の興味は無い。しかし。
「――……いや」
「……何？」
既に半分以上背を向けかけていたオシリスだが、リンデンバウムの呟きのような否定の言葉に足を止めて振り返った。
「何だと？」
「イシュタルはいた。ヴァース・ファウストフィートの元にな」
実際にはリンデンバウムがそうさせたと言っていいが、その辺りは一切省いた。
「お前……ッ。どういうつもりだッ！」
「っがッ！」
かっと眼を見開いたオシリスの怒声と共にリンデンバウムは体を折って苦痛に呻く。
幼い時、シェアディールに飼われた直後に刻まれる禁術二十六法の呪い。オシリスの意思一つで発動するそれは強靭な肉体と魔力、精神力を持つリンデンバウムをも容易く屈伏させる力がある。
「私はイシュタルを連れ戻せと言ったはずだ！」
「ぐっ、うぅ……ッ」
「ヴァース・ファウストフィートの元に居るなら尚更だ！　お前、私に逆らうつもりか！」
「あ、あ・ァああアァァっ！」
二十六種の異なる呪いのうち、更に二種を加えて発動された。痛み以外の全てが押し流され、自身が悲鳴を上げている事すらリンデンバウムの意識には無い。
尤もこうされるのを判っていてヴァースとイシュタルを見逃して来たのだが。
「っは、……っ、は……ッ」
体力も精神力も根こそぎ削られて、呪いを収められた後も立ち上がる事が出来ず地面に転がったまま息を整える。
「なぜ連れて来なかった」

「――……たまには、自分の、趣味を、優先させただけだ……」
くっと唇を吊り上げて笑ったリンデンバウムにオシリスは躊躇わず手を上げた。抵抗を全て奪われて張られた頬が赤く染まる。女の平手だ、大した事は無い。
「私を裏切るのか、リンデンバウム。一つ二つの呪いでは温いという事か？」
「裏切るつもりは、別にない……。一生呪いを発動されたまま生きて見せしめにされるのは御免だからな」
シェアディールを裏切った護り樹の末路は幼い頃から刷り込まれている。自分の護る主を先に失っても同じ事。
（何が護り樹だ）
金で買われた肉の盾。俗称の『贄の樹』の方が余程らしい。
ようやく鈍痛も少しずつ治まって来て、リンデンバウムは震える腕で体を支えながら身を起こす。その姿を冷徹に見下ろして――彼が立ち上がってからオシリスは口を開く。
「リンデンバウム」
「……何だ」
「私を裏切るつもりはないんだな」
「あぁ」
じっとリンデンバウムを眼で射って――オシリスは憎悪に近い感情を乗せて吐き出した。
「ヴァース・ファウストフィートを殺せ。必ずだ。その首私の目の前に持って来い」
「心配しなくても今頃イシュタルと一緒にこっちに向かってるさ」
「イシュタルと……か。何故……」
ギリ、と唇を噛み締めオシリスはリンデンバウムを見据えもう一度口にした。
「殺せ。いいな」
「判った。……イシュタルはどうする」
「連れて来い。始めからそう言っているはずだ」

「連れ戻してどうする。逃げた責でも負わせるのか」
「ふん、何を」
リンデンバウムの言葉を一笑に伏し、オシリスは初めて表情から険を拭って微かに微笑んだ。
「シェアディールの当主は私だ。誰にも何も言わせん。私が継いだんだからそれで十分だろう。――だから戻って来いと言うだけだ。イシュタルは私が守ってやる」
「……」
（イシュタル。お前は別にシェアディールじゃなくていい。お前がお前であればそれでいいんだ。お前は……お前だけが私の……）
目を閉じ、思い出すのは幼かった頃の優しい時間。そして今も、ただ一人だけ変わらずにいる絶対の聖域。
（だから――お前は絶対誰にも渡さない）
今イシュタルが心を砕いているだろうヴァースへ歪んだ殺意を向け、パキリとオシリスは手近にあった木の枝を手折って潰すように握り締めた。
「戻るぞ」
「ああ」
手から落とした枝を踏みつけ与えられた部屋へと戻るオシリスの後に付き従いながらリンデンバウムはうっそりと唇を歪ませた。
（早く来い、ヴァース。これでお前に逃げは無い。例えカラムを放棄したとしてもだ……！）

3―5

リンデンバウムの到着から更に四日ほど遅く、ヴァースとイシュタルはヒルディアの首都にまで辿り着いた。
普通に急いでの順調な日数。旅慣れしていないヴァースにしてみれば上等といった所だろう。
身形は整える必要があるので目立たないよう王城から離れた宿を取って一日休む事にした。
「今更なんだが」
「ん？」
ようやく腰を落ち着ける事が出来てほっとして、ヴァースはふと気が付いた疑問を口にした。
「お前、いいのか？　シェアディールから逃げてきたんだろ？」
「うっわ本当に今更だな。それ言うなら普通出る前だよな」
「煩え」
出る前はもう自分の事で一杯一杯だったのだ。今もそうといえばそうだが時間が経てば少しは冷静になる。
「うんまあ、戻ろうかと思ってる」
「……そうか」
「や、勿論カラムの一件が片付いてからな。流石に途中でほっぽり出したりしないって」
ぱたぱたと左右に手を振って――イシュタルは苦笑いし、パタリと手を落とす。
「シェアディールの最終試験ってやつがさ、まあ、実戦なんだよ。シェアディールの名前使わないで、戦争やってる所に行って平定してくるってやつ。俺は受ける前に逃げたけど、姉上の試験に付いて行ったから……知っては、いる」
息を付き、随分昔の事を思い出すかのようにそう言った。二年前の事だから、イシュタルの年齢にしてみれば十分昔の事だ。

「子供の頃はさ、良かった。本当に。勉強だけしてれば良かったし」
伝え聞く功績は大きく輝かしいものばかりで、子供心に一族を誇りに思ったものだ。シェアディールの名に恥じぬようにと、夢中で勉強にのめり込んだ。
「周りの大人たちは厳しかったし、騙そうとしてるかそうじゃないかとかの見極めも訓練に入ってたから二人だけしか信用出来る人はいなかったけど、二人で充分だった」
「二人？」
数が合わずにヴァースは首を捻る。イシュタルと姉なら、お互いで一人のはずだが。
「あ、俺と姉上とリンデンバウム」
「……あぁ」
納得した。
（って事は、イシュタルを心配してたあれはやっぱり本当だったんだな）
そしてイシュタルの親しげな呼び方から見ても二人の関係に嘘は無いだろう。殺害対象として眼を付けられているヴァースとしては複雑だが。
「仲が良かったんだ、本当に。リンデンバウムが護り樹の候補として俺達に付けられたのなんて俺が生まれてすぐだったし」
生まれた時から姉とリンデンバウムと一緒にいて、そして自分達よりも年も力も上な頼りがいのある絶対の守護者に信頼を置くのに理屈は無かった。
「兄弟みたいなもんだった。三人で」
（……過去形？）
イシュタルの口調からして、まだリンデンバウムに親しみを感じているのは間違いない。――リンデンバウムの方も、おそらく。
……では、当主は？
「――最終試験の時、リンデンバウムがミスを犯したんだ。まあ、俺達全員の、かな」

若年ながら歴代の記録を大きく塗り替え女の身で登り詰め、オシリスはリンデンバウムの呪いの発動権限を手に入れた。
少しでも早く、彼を苦痛から解放する為に。もう『贄の樹』などとして使わせない為に。
「殺さなきゃいけない人間を取り逃がした。そいつを手引きしたのはその時のシェアディールの当主だった」
それを知ったのは、全てが終わった一年も後だったけれど。
失態はリンデンバウムの口からではなく結果で現れた。多大な損害を出して。
正に丁度その時、リンデンバウムは呪いの発動でのたうち陣中に戻る事すら出来なかった。
まさかと思っただろう。オシリスの意向は叶えられ、発動権限の全ては彼女にあると思い込み、苦痛からの解放に安堵した直後だったから。
「実際に発動させたのは別の……当主、だったんだけどさ」
冷静だったら、そんなはずがないという理性が勝ったかも知れない。もしくは掛けられた呪いの中に精神を蝕む物があると知っていればまた結果は違ったかも知れない。
陣に戻ったリンデンバウムはオシリスに問い掛けた。何故、と。失態の責めは勿論負う――だがそれが何故『贄の樹』への罰なのだと。
「……急がなくちゃならなかった」
切り抜ける手はオシリスの中にあった。急げば間に合う。そして――その為にはリンデンバウムの力は必要で。
「会話は短かった」
呪いで感情の高ぶったリンデンバウムと、初陣で、やはりいつも通りでは無かったのであろうオシリスの間の疑心は最悪の形で決着がついた。
オシリスが呪いを発動させ、リンデンバウムを屈服させる、という形で。
「……贄の樹なんて、思った事無かったのに」

自ら発動させた呪いに喘ぐ姿に、その時オシリスははっきり蒼白になっていた。
『所詮お前も俺を贄の樹として使うのか――』
怒りと絶望と落胆と、綯い交ぜになった視線に射抜かれ愕然としたオシリスを置いてリンデンバウムは行った。『シェアディールの命』をこなす為に。
転がる様に壊れて行くオシリスとリンデンバウムの関係が怖かった。比例するように自分に執着する姉も。そしてイシュタル自身の最終試験が巡って来た時――怖くなって逃げ出したのだ。
「多分、主従じゃなかった姉上とリンデンバウムの関係を清算させたかったんだと思う」
「……イシュタル」
「変えようって、話してた」
ぐ、と手に爪が食い込む程に強く握って、ぽつりと呟く。優しかった時間の夢物語。
「生き残って、当主になって――シェアディールを変えようって。『贄の樹』なんて作らないで、無理に軍神なんか作らなくたっていいじゃないかって」
人としてのリンデンバウムと親しくなったが故の、人としての当然の想い。――しかし。
「その後も多くの戦場を見る事になって、知が力になる事を知った」
そう、軍師一族シェアディールに期待する声は大きい。力が無ければ何も出来ない。どんな理不尽にも。
もしその時に、手を貸し、勝利へ導いてくれるものがいたなら。
「……」
「必要か不必要かって言われたら、シェアディールはあった方がいいと思う。そしてその為には、確かに護り樹は必要なんだ」
非常に狙われやすい身を守る為、そして力無きものの代わりに力が必要なプランを実行する為に、優秀な、そして忠実な実力者が必要なのだ。

「それでもやっぱり、今の形は違うと思う。だから、俺はシェアディールに戻るよ」
「いいのか」
「ああ。逃げてきといて何だけど、俺やっぱり逃げるの好きじゃないみたいだから」
（だって思い出しちまったし）
逃げて行くうちに身に染み込んでくる逃げる為の理由付け。それもイシュタルの中では嘘ではなかったけれど。
「頑張ってみようと思う。どうにもならない状況でも頑張ってる人なんか、結構近くにいるもんだしさ」
自分に笑い掛けてそう言ったイシュタルにヴァースは胸がざわつくのを感じた。
（こんな……何の覚悟もしてねえ俺が）
イシュタルはそれを知っている。知っていて、それでも覚悟を決めたのだ。
自分はどうだ。状況に流されるままこんな所に来てしまっている。自覚すら殆ど無いのに、カラムの領主としてヒルディアの王に会おうというのだ。
（――……酷ェ事、してる）
ファウストフィートに就いただけならばシアに脅されたでいいだろう。しかし今ここにいるのはヴァース自身の行動の結果。イシュタルの道を変えさせたのは間違いなくヴァースだ。そしておそらく、これからカラムの先を手に担う。
（何……やってんだ、俺）
「ヴァース？」
「っ。――あ、な、何だ」
「いや、そろそろ休もうかって。明日は疲れると思うぞ。慣れない事だから」
そうだ。迷う暇もなく明日なのだ――と重い気分で認めた後はたと気が付いた。

「そういやヒルディアに行くって連絡したか？」
「してる訳ないだろ。カラムからヒルディアに使者なんか送ったら誰に見られるとも知れないじゃないか」
「おいっ？」
　同じ理由でここに来る直前にシルギードの使者に門前払いをくらわせたのに、平然とイシュタルはそう言った。
「大体ここまで俺達だって急ぎで来たんだから使者と並んで辿り着いたって意味無いだろ」
「明日は無理じゃねーか……？」
「ファウストフィート本人が来てるなら会うさ」
　今のカラムは二国間にとってかなり重い。領主自らが出向くというのは少々軽い様な気がしなくもないが、元々カラムは国だの体面だのに拘る必要のない場所だ。
「そうじゃなくても俺の顔だけでも姉上は会ってくれると思うけど」
「……そうか、そりゃそうだな」
　連れ戻そうとしていた弟が戻って来て門前払いはないだろう。ヴァースにした所で殺したい相手だ。飛んで火に入る何とやら、だろう。
（そうか。そういや俺ここで殺されるかもしれないんだな）
　オシリスの考え次第では、イシュタルとて信用出来ないのだ。
――まあ、イシュタルなら楽に殺してくれるだろう。カラムの先も心配しなくて済む。
（それならいいか）
　いっそその方が楽でさえあるかもしれない。
――苦しいのだ。
イシュタルの事もシアの事もカラムの事も。考えようとする自分が嫌だ。
「じゃあ、そろそろ休む。また明日な」
「ああ」
　イシュタルと別れて取った部屋へと行き、ヴァースは考えるのを

放棄して眠りについた。

3―6

「ようこそいらっしゃいました。ファウストフィート公。そしてシェアディール殿」

城の門近くでヴァースとイシュタルを認めた門番はそう言ってあっさり二人を中に通した。そのまま先に立ち案内されたのは大陸随一の王国に相応しい歴史を感じる荘厳な造りの王城の中でも更に一段重々しい雰囲気を醸し出す扉の前。

「どうぞ。竜妃リエンがお会いしたいと申しております」

重厚な扉に手を掛け、警備していた兵二人が観音開きに押し開く。大きく広く取られた謁見の間。その最奥に設えられた王座と、周囲の兵。

近づいてみれば王座に座る女王が紛れもなく幼い少女と知れる。

「ようこそ参られた、ファウストフィート公。わらわがヒルディアが王、リエン・ベルディティスニー・ヒルディアじゃ。まあ、楽にするが良い」

少女らしい幼く高い声音に似合わぬゆったりとした物言い。桃色の髪を左右に分けて大きなリボンで結っている。つり気味の大きな瞳は勝気な光に輝いており、可愛らしいと言って問題ないその容姿と反する力強さを湛えていた。

幼い頃から徹底的に覚悟を決め、そして今重圧を支える柱としての、王の瞳。

「ふぅむ。本当に金髪なのじゃな。実に美しい、太陽のようじゃ」

「たかが色です。何も変わりはしません」

「気に障ったかのう？　まあ許せよ。わらわは美しい男が好きなのじゃ」

明け透けに言われた言葉に、情報として知ってはいたものの何を答えるべきなのかヴァースは絶句して返せなかった。そのヴァースにリエンは楽しそうに目を細めくつくつと笑う。

「存外初心なのじゃな？　実にわらわの好みじゃ。どうじゃファウストフィート公。カラムの事はわらわに任せヒルディアに来ぬか？
悪い様にはせぬ。勿論自治権も含めてな」
「……お戯れを」
十三の子供に何故初心だのなんだの言われなくてはならないのかと心の内には苛立ちが生まれたが相手は王だ。言葉を抑えて少なく答える。
「ふん、確かにの。ではお主等の要件を聞こうか。領主と軍師が揃って出向いて顔見せの挨拶という事もあるまい」
「いいえ、仰る通りです、陛下」
「……ほう」
微笑して言ったイシュタルの言葉にリエンはぴくりと片眉を上げる。
「今この時期に――か？」
「今この時期だからこそとは思われませんか」
「……ふうむ」
しばらく考えるように静かな沈黙がその場に流れた。だがリエンの表情は決して不快そうなものではない。
「面白い事を言うのう。お前の姉は猛々しい女じゃがお前は絡め手の方が好みのようじゃな」
「シェアディールの知は無力な民の為の物。陛下とて無辜の民を思えばこそ、今王座に居られるのでしょう」
ざわりっ、と小さく広間がざわめくがリエンが腕を上げるとそれはすぐに収まった。
「正にその通りよ。しかしわらわは王じゃ。人一人の為には動かぬ。判っておるな」
「勿論」
「……」
もう一度――順番にヴァースとイシュタルを見てからリエンはニィと唇に笑みを作った。

「よかろう！　数日わらわの城に留まる許可を与えよう！」
「有難うございます」
「ふふ。構わぬ。わらわは美形には弱いのじゃ。――二人を客間に案内致せ。大切な客人じゃ、丁重にな」
側にいた側近らしい女性にそう告げてリエンは玉座から降り立つと後ろの控室へと戻ってしまった。終わり、だ。
「ではこちらへ。ご案内致します」
リエンに命じられた女性の案内に従って謁見の間を後にする。長く広い通路を渡って通されたのは別館にある一室だった。イシュタルとは向かい合わせに部屋を宛がわれる。
「何かございましたらご遠慮なく仰って下さいませ。では、失礼します」
堅苦しく態度を崩さない物言いが少し前までのシアを思い出させる。……やはり、強い女性は苦手だ。リエンもそうだったが。
「どうだ？　感想は」
訪れたばかりの部屋にも関わらず既に慣れて寛いだ様子で上質のソファに体を沈め、イシュタルはそう聞いてヴァースを見た。
「感想？」
「竜妃だよ」
「竜妃って言うか竜姫って感じだけどな。……まあ、普通じゃないか？」
年齢にしては勿論落ち着き過ぎているし性格もヴァースの苦手な部類に入るがそれだけだ。そのヴァースにくすくすとイシュタルは楽しそうに笑う。
「十三歳の女王が普通か。ま、お前らしい見方かな」
「……お前の言い方って何っか鼻に付くんだよな」
「まあいいからいいから。――リエンはな、十歳の時に自分の親である女王を殺して王位を奪ったらしい」
「――なっ？」
リエンが十歳で王位を継いだ事は、大きなニュースだったから勿

論ヴァースの耳にも風の噂で入って来ていた。しかし前女王は病で無くなったというのが公式発表であるし、たかが十歳の子供に謀など出来る訳もないと思っていた。
だからもし、前女王が人為的に殺害されたのだとしても。
「……周りの大人が、だろ？」
「そっちは多分利用された側だな。ま、噂だけど」
「そうだろ、噂、だろ」
「そう、噂。火のない所に何とやらってね」
「……」
そう言えばリエンとの会話でもイシュタルは含んだ言い方をしていた。周りの家臣達もざわついていたが。
「そんな風には見えないけどな」
イシュタルの言葉がそれを示唆したものだったというならば、リエンは決して嫌われていない。
「いい治世って事さ」
「……それは」
前の王よりも――という事か。
考えるとぞっとする。十歳の身の上で親を殺して――民の為に王位に付くなど。
（だからか）
わらわは王だ、と言い切ったリエンに比べものにならない覚悟を見たのは。
考えるだけ重くなる気分にヴァースは首を振って考えを追いだして、他国の事情よりもまず自身の事へと話を戻した。
「で、だ。俺はこれからどうすりゃいいんだ」
「……うん、良かったお前が口挟まないでいてくれて」
少し遠い目になってイシュタルはしみじみと呟いた。
「自覚はあるからさっさと言え。腹立つんだよお前」
「何で俺達はここにいるんだと思う？」
「何でって、シルギードにカラムに手出しさせないためだろ？　…

…それとお前の姉貴に会う為」
流石にそもそもの理由を忘れる程馬鹿ではない。ただ現在の状況がこれでいいのかどうかはヴァースには判らないのだが。
「それは目的。何でリエンが俺達をここに置いてるかってことだよ」
「……ヒルディアもカラムが欲しいから、だろ？」
今度は少し考えてからそう答える。ヴァースを懐柔する手で来るかもっと強引な手段で来るかは判らないが。
「あぁ……俺もそう思ってたんだけどさ」
釈然としない様子でイシュタルは首を傾げて、肯定は返してこなかった。
「俺はリエンが強引にでもカラムを手に入れたがってるんだと思ってた。それで姉上が動いたんじゃないかって。――けどそんな感じじゃない」
リエンの態度に嘘は無かった。その辺りの見極めには自信がある。そして城に留まる許可を与えたという事は少なからずこちらの意を汲む心積もりがあるという事だ。
「じゃあ何もしなくてもこれで普通に回避できんじゃねえの」
もしヒルディアがカラムに何も求めないままこうして友好を重ねる事が出来ればそれは確実にシルギードへの盾となる。ヒルディア側に戦争の意思が無いのならわざわざシルギードを使っての威圧という、より緊張を生む工程は取らなくて済むようになるのだ。
「だからそれはまだだって。だから滞在許可なんだって。こっちの意を汲んでいいか今試されてるんだよ」
「……主語は俺が、だよな」
「当然」
（それでも試してもいい、とまでは思ってもらえたわけだ）
だとすれば来訪の第一段階としては上出来だろう。自分にしては。
「つかじゃあ、これからどうすんだ」
「うん素でいいと思うけど。お前とリエンの相性は悪くないよ。それにお前自身が信用を勝ち取った方が良い。俺すぐ帰るんだから」

「……そうだな」
領主としてならそれが当然。イシュタルにだけ頼っている訳にはいかない。
「心配するな。絶対リエンはお前を認める。お前は俺をその気にさせたんだから自信持てって。お前は人の上に立てる人間だ」
「……」
そう言われる度に生まれる自己嫌悪を詰めた息が出そうになるのを飲み下し、見なかった事にする。しかし胸に重く溜まり続けているそれは決して消化されないのだけど。
「でもだから――余計姉上が何考えてるのか判らないんだよな。夜になったら会いに行ってこようと思う」
「大丈夫か？」
一応滞在を許されたとはいえ、夜中にフラフラ出歩いていたら妙な勘繰りをされるのではないだろうか。
「大丈夫だって。幻術は結構上手かったろ？」
自分の身を守るのに護り樹だけに委ねる程シェアディールは愚かではない。多少の護身術と共に、最も適性の高い戦闘技術を磨く事になっている。武芸に関しては二の次なので実際に一流とは呼べないが、それでも特化した部分だけならば一流と呼んで差し支えない腕前を持っている。
一番初めにヴァースと会った時も別に助けてもらわずとも切り抜ける自信はあったのだ。折角助けてもらえるのだからとわざわざ労力は使わなかったが。
「だから気を付けとけよ。ま、あの様子じゃリエンが何かしてくるとは思えないけど」
「ああ、判ってる」
（リエンは確かに何もしてこねえだろうが――）
おそらくリンデンバウムは、来る気がする。

3―7

（ん）
すっかり陽も落ち、大方の人間が寝静まった頃、まだ寝付いて無かったヴァースの眼にほんの僅かではあるが魔力の歪みが見えて顔を上げる。歪みの本体は壁を隔てた廊下側。
（イシュタルだな）
行ったんだろう。そう納得すると同時にそ、と肩に手が置かれた。
「！」
慌てて振り払い立ち上がると、薄く笑みを浮かべてリンデンバウムがそこに立っていた。
「よく来たな、ヴァース。待ち侘びていたぞ」
言いながら両手に空刃（ルフト・クリンゲ）を纏わせ一歩近づく。リンデンバウムならば他に幾らでも扱える魔術があるだろうにわざわざ使い勝手の良くない初級魔術を好むのは己の手で斬る感覚をより近く味わいたいからだろう。
「待て。一つ聞かせろ」
「いいぜ。何だ。手短にな」
「何で今、シェアディールは俺を殺そうとしてる」
「私怨だよ」
言った通り答えは返って来た。過ぎる程に簡潔に。
だがその答えはヴァースに頷けるものではなく、むしろ全く判らない。
「お前が俺を殺したいってのは判る。だが」
「生憎、そっちは俺のじゃない」
たんっ、と軽く床を蹴ったリンデンバウムに全身の神経が一気に集中する。
前回は全く付いていけなかったリンデンバウムの動き。冷静な分、今度は何とか動きだけはその脅威を覚えている眼が必死に追い掛け

た。
剣を抜きそびれた鞘のままで空刃を受け止め、そのまま力任せに鍔競り合う。
まだ手加減されている。相手をいたぶる事を目的とした絶対的な強者の余裕。
「中々センスいいじゃないか」
「――っ。シェアディールに恨まれる覚えはねえ！　特にテメェと初めて会った時はなっ。そんなんで恨みとか言われて納得できるか！」
「ああ、あの時は別に何でもなかったさ。俺の主はな、イシュタルを見付け出したかったんだ」
　不意に真正面から向け合っていた力の方向が変わり、瞬間行き場を無くしたヴァースの力が浮く。懐目掛けて突き出されたリンデンバウムの手刀を、バランスを崩しそうになった体を何とか踏み止まらせて後ろに下がって距離で逃れる。
「ヴァース・ファウストフィートが死ねばここは戦場になるだろう？」
「……な、に……？」
　リンデンバウムが口にしたその言葉に、ヴァースは耳を疑った。
「……何、だと？」
「だから――お前が死ねば争いが起こるだろう？　イシュタルがこの辺に来てるのまでは掴んでたからな。争いが起こればきっとイシュタルは表に出て来る――とのお考えだそうだ」
「何、を、馬鹿な！」
　シェアディールの知は弱き民の為の物――
そう誇りを持って言ったイシュタルの言葉に嘘は無いのだろう。
そのシェアディールの当主が、肉親を見付け出すその為だけにファウストフィートを消そうとしたと、そう言うのか。
「ま、やる気になったらやって来いレベルだったからな。俺もそれぐらいのノリだったさ」

しかしいざ殺しに行ってみれば中々楽しみ甲斐の在りそうな獲物で、もっと美味しく仕上げてみたくなったのだ。
「じゃあ――今は何だよ。イシュタルは戻るって言ってるぞ！」
「オシリスはそれ知らないしな。それに例え知った所で変わりゃしないさ。イシュタルがお前に付いた時点でな」
「何……？」
「可愛い弟が自分以外を目に映すなんて、許せないんだそうだ」
（――っ。それ、だけでっ）
それだけで、戦の火種となりうる事を自らの手で起こそうというのか。
（壊れてる）
イシュタルの信頼する姉の姿は、もうとっくに壊れていたのだ。
「もうお前がファウストフィートかどうかは関係ない。どこに逃げようが許されないぜ！」
「っあ！」
一歩踏み込んで来たリンデンバウムがはるか間合いの外から空刃を振るう。その長さはいつの間にか変化しており、話への衝撃に気を散らせていたヴァースは妖精の瞳（グラム・サイト）に映るそれに気が付かず対応出来なかった。
手から剣は弾かれ無防備になった体を蹴り飛ばされる。
魔力を纏ってこそいなかったが、強靭な筋力と適切なスピード、そして金属で補強された靴での蹴りは十分脅威だ。
「がッ」
受け身も取れず吹っ飛ばされたヴァースの前に悠然と立ち凶悪に笑う。
「ま、今更逃がさないけどな」
「――っそれで、いいのかっ、テメェは」
「何が」
「シェアディールの当主がんな事してて、それでいいのかテメェは！」

ヴァースの叫びに冷笑を浮かべリンデンバウムは肩を竦める。
「シェアディールの考えがどうだろうが護り樹には関係ない。元々俺は人殺しの為に買われて教育されてきたんだ。狂人に今更常識が通じる訳ないだろ？」
「シェアディールが、じゃねえ。テメェの義兄妹（きょうだい）が、だ」
「……」
言われた言葉を解するのに一瞬間が空き、次いでその刹那リンデンバウムは表情を凍らせた。
「……イシュタルにでも聞いたか。よくよく人に懐かれる奴だな」
「戦争を本当に無くしてやろうって、護り樹なんかなくしてやろうって、そんな夢があったんだろうが」
「昔の話だ」
吐き捨てたリンデンバウムの眼に怒りは無かった。ただ諦めと――優しかった時間が生み付けてくれた悲しみだけが隠せずに過ぎる。
「たかが夢だ」
一瞬の泡沫。夢だったから自分に優しかっただけ。
（その証拠に見るが良い）
今オシリスは躊躇いなく自分を贄の樹として使うではないか。所詮は使う者と使われる者。
――何も変わりはしない。
「イシュタルは今もお前を慕ってる」
「……っ……」
「変えるつもりで戻るそうだ。シェアディールに」
「……だから、なんだ……ッ」
「変えたいんだって。お前もそうだろ」
当然だ――
考えるまでも無く、誰でもリンデンバウムの立場なら頷くだろう。
呪いで縛られるこの立場から解放されたくない訳が無い。
だがヴァースの言葉は贄の樹という立場ではなく、リンデンバウムへ向けて言われた言葉だ。

「お前の立場なら、シェアディールを恨んでいいはずだ」
「……恨んでるさ。そう見えないか？」
「見えねえな。お前は裏切られ続けてる今だって何も恨んじゃいねえんだ」
シェアディールに対しては、どうか判らない。それこそ恨んではいるのだろう。
だがかつてオシリスとイシュタルと、三人で語り合った夢を今壊し続けているオシリスにだって、リンデンバウムは怒りも恨みも抱いていないのだ。
――ただ、オシリスが自分を贄の樹として扱うのが悲しいだけ。
「お前は」
イシュタルを大切にしているのは初めての遭遇の時から明らかだった。けれどそれと同じぐらい。
「今も当主が大切なんだ」
「――だから、何だッ。それで何が変わる訳も」
セリフの途中でリンデンバウムの服を掴み、よろけながら立ち上がる。動作は緩慢で振り払える時間は十二分にあった。
しかし咳き込みながら立ち上がり、襟を掴み直してその眼を合わせられるその時までリンデンバウムは動けずに立ち尽くす。
絶句して自分を見詰めるリンデンバウムの視線をしっかりと受け止め口を開く。
「逃げんな。諦めたくねえくせに、イシュタル一人に押し付けんな」
（……あぁ。綺麗だ）
強い意志で煌めく澄んだ紫の瞳に、何だか無性に笑いだしたくなった。
「……お前は。思ってたより嫌な奴だったな」
手の平で顔を覆ってリンデンバウムはくつくつと笑う。
「お前の瞳が意志を持てばさぞ壊し甲斐があると思ったんだが」
いいや、壊し甲斐はある。自分の眼は間違っていなかった。この眼を見ながらゆっくり生命を削っていくのはそれはもうゾクゾクす

るだろう。
だがそれよりも――
「お前の眼は強すぎる」
何故知られたくない――しかし気付いて欲しい心の内が、視えるのだろう。
「仕向けておいて何だが、性質が悪い」
「っ」
蹴られた患部に手を当てられ身を引こうとするが、リンデンバウムが使っているのが治癒術なのに気がついて彼を見上げる。
凶悪な歪んだものではない、おそらく彼本来のものだったのだろう、淡く微笑したリンデンバウムは敬意と好意の混ざった眼でヴァースを見詰めていた。
「さて。行くぞ」
「って、俺もかっ？」
先程までは苦しかった喋るという行為も今は支障なく行えた。
すいと身を離し先に立って歩き出すリンデンバウムの背を眼で追って――はあと息を吐いた後でその後に付いて歩き出す。
「お前だってオシリス説得しなけりゃ困るんだろうが。今のままだと俺が逆らったって意地でもお前を殺しに来るぞ」
「そうさせたのはテメェだろうが……」
「そう言うな。そのお陰でカラムも守れるんだからお相子という事にしとこうじゃないか」
「高えよ！　ったく……ッ」
がしがしと頭を掻いて――しかし今は確かにそう悪い気分でもなかったから忘れる事にした。
「で？　あっさり決めたが、いいのかお前」
「ん？　あァ」
リンデンバウムがオシリスに逆らうという事はイシュタルが抗議するのとは訳が違う。彼の体に刻まれたシェアディールに逆らわせない為の呪いが生きている限り。

「それはまあ、俺も痛みに善がって悦ぶ趣味は無いんだがな……」
ふう、とわざとらしい作った溜息を吐いてから首を傾け後ろのヴァースへ視線を向ける。他の誰かに良く似た表情で。
「あんまり逃げるの、好きじゃないんでな」
「――っ」
そのセリフはつい最近聞き覚えがあって、ふわりとヴァースは唇を綻ばせた。
「お前らやっぱ、兄弟だろ」

3―8

オシリスがどこの部屋に通されているのかなど、勿論イシュタルは知らなかった。だが別に焦ってもいない。夜は長いのだ、城を見回ってみればどこかで見付かる。
リンデンバウムが側にいれば例え幻術で身を隠していても見付けてくれるだろうし――と気楽に考えていた所で、ガチャリとすぐ先の部屋の扉が開いた。
「イシュタルだろう？　来い」
「――姉上」
辺りに人気が無いのを確認し、幻術を解くとオシリスが促すまま中へと入る。微妙な関係にあるヒルディアとカラムに所属している互いの軍師が夜中に密会など、何を勘ぐられるか判った物じゃない。まして実の姉弟なのだから尚更だ。
だというのに、目の前のオシリスは些か無用心に過ぎるように見えた。
「らしくない」
「何がだ？」
「表で俺の名前なんか呼んで。誰かに聞かれたらどうするんだ」
「別に構わないさ。――あぁ、やっぱり大きくなったな。二年も会わないと流石に。でも変わってない」
嬉しそうに笑ってオシリスは自分とそう変わらなくなった背丈のイシュタルを抱き締め髪を掻き回した。
「ちょっ、姉上！」
子供の頃は確かにこうして姉やリンデンバウムに頭を撫でられたものだが、流石にこの年になると恥ずかしい。
抗議の声を上げてオシリスを引き離し、動揺に上がった息を吐く。
「どういう事なんだ」
「何がだ？」

「構わないって、姉上はヒルディアの軍師だろう」
「まあそうだな。だが構わないんだよ。ヴァース・ファウストフィートはもう死んでる。リンデンバウムの仕事だ、間違いない。まぁ、もしかしたら生きてはいるかもしれないが同じだろうな」
うっすらと唇に歪んだ笑みを浮かべ――酷く嬉しそうな声でそう言った。
「――な、に？」
慣れ親しんだはずの姉の顔、姉の声。だというのにそこから発される全てが記憶にあるものではなくて、堪らない違和感を感じる。
「ヒルディアがカラムを抑え、そしてシルギードへ。ヒルディアに纏められた方が安泰だろう？」
「何を、言って……」
それは戦を前提とした話だ。確かにヒルディアの治世は悪くないが、それは動乱を起こしてまで成すべき事ではない。
カラムさえ今の状態を維持できれば無駄な戦乱など起こらないのだ。
「そう、だ。ヴァース。姉上、どうして。何でわざわざ戦を引き起こすような真似を。いや、それにしたって殺す必要はないじゃないか。カラムが必要なら譲渡するなり何なりすればそれで――」
「だって邪魔だろう？」
「……邪魔？」
オシリスの話が先程から飲み込めない。自分の頭はそれほどまでに鈍ってしまったのだろうか。――いや、むしろそうであって欲しい。
先を促す言葉を紡いだ口の中は乾いてカラカラだ。それはイシュタルが既にオシリスの言葉の先を想像してしまっているからだ。
「身の程知らずもいい所だ。イシュタルの眼に映っていいのは私だけ。そうだろう？」
「……まさか。本当に。本当にそれだけの理由で？」
自分の頭が鈍った訳でも何でもなかった。理解できなくて当たり前。オシリスの行動はシェアディールの――人としての道から外れ

てしまっていたのだから。
「私はイシュタルだけでいい。お前だけでいいから……お前だけは絶対に離さない」
「姉上……ッ」
内容に反してオシリスの口調は淡々としたものだった。冷たく凍りついてしまったその心そのままに。
二年前までの姉はこんな人ではなかった。
確かに信じていい者などいなかった一族の中でオシリスとイシュタルの依存度は度を超えていた。だがそれで他人を拒絶するような事は無かったし、何より自分の目的の為にシェアディールの知を使うような人ではなかった。
シェアディールの名を使って戦を引き起こすような人ではなかったはずだ――
（……俺のせいなのか）
オシリスの行動が真実自分を見付け出すだけの為であったなら、これは自分のせいなのか。
オシリスを傷付け、カラムが、シルギードが壊されそうなのは。殺させたくないと願った、初めて選んだ主を喪ったのは。
逃げた自分のせいなのだろうか。
（ヴァースが死んだら、ファウストフィートはもういない）
カラムの自治は失われる。今おそらくカラムはシルギードにも見張られているだろう。――どちらがカラムを取っても、そこで必ず被害が出る。
ヒルディアが支配した所で、おそらくシルギードよりはマシ、という程度だろう。
「心配するな。私は必ずヒルディアを勝たせる。そうしたら私と共に来い。別にシェアディールでいる必要は無いんだ。私に必要なのはお前自身なんだから」
「悪いが、ヒルディアにカラムを売る気は無いぜ」
「！」

掛けたはずの鍵も開いて、音も立てずにいきなり割って入った声にイシュタルとオシリスは揃って振り向く。この数日で聞き慣れた心地良いテノール。自然と安堵の息と共にその名が零れた。
「ヴァース……っ！」
その背後に控えたリンデンバウムが再び部屋を閉ざして鍵を掛ける。
「リンデンバウム！　お前！」
目を吊り上げ怒声を上げたオシリスが罵声を浴びせるより早く、つかつかと歩み寄ったヴァースが手を上げ彼女の頬を平手で打った。手加減はしたが、それなりに力は入れて。
「……っ」
次期シェアディールの当主としてずっとリンデンバウムに守られてきたオシリスだ。自分が叩かれた事に唖然としたものの、すぐに目の前の男を睨み付けた。
「男が女に手ェ上げんのはどうかたァ思うんだが」
「……」
「けどまずは叩いておこうと思ってな」
「……ふん。カラムの一件を使われたのが気に食わないか」
唇を笑みの形に歪め言い捨てながらオシリスは若干の焦りを感じていた。
リンデンバウムは呪いで無力化出来る。だがヴァースとイシュタルと相手取って凌げるか。
（いや、出来る）
戦場で生き残って来た自分だ。実戦の経験などろくに無い二人ぐらい一人で凌いでみせる。
「勿論それもある。だが今叩いたのはお前個人にだ。何が軍神だふざけんな」
「シェアディールが自分の為に知を使うのが気に食わないとでも？」
「馬鹿か」
「馬……っ？」

おそらく生まれてこの方向けられた事は無いであろうその単語にオシリスは一瞬固まった。
「シェアディールは関係ねェ。自分一人の為に戦を起こそうなんて考えが誰であっても許される訳ねえだろ」
シェアディールに勝手に期待するのは人々だ。オシリスやイシュタルにそれに応える義務は無い。その名前を利用しない限り。
だがオシリスが行ったのは、例え自分に出来たとしても決してやってはならない行為。
「……そうだよ。戦を回避する為の、終わらせる為の知だろう、姉上」
「イシュタル……」
「俺はシェアディールが好きじゃない。だから逃げたんだし。だけどその一線を越えてしまったら今までの犠牲を本当に踏みにじる事になるじゃないか」
軍神シェアディールを造り出す為に贄の樹となった者達は勿論、勝利までの過程で犠牲となった全ての者達に対して、今のシェアディールには責任がある。
「……要らない」
ぽつりと、感情を置き忘れてきた声でオシリスは一言呟いた。
「意味なんか要らない。そんなものに価値なんか無い。私はお前だけでいいんだ」
「何でだ」
「……何故？」
静かに問い掛けられたヴァースの言葉をオシリスはぼんやりと復唱する。
「以前のお前はそうじゃなかったんだろ。どうしてイシュタル以外に価値が無いなんて思うんだ」
「……やめろ」
子供の頃から共に居る、真に信用出来る者だから――
確かにイシュタルへの好意はそこから来ている。では、他の者の価

値を認めなくなったのはいつからか。
「何故イシュタルにだけ価値を置く」
「イシュタル、は……」
心の震えが声に現れ先が続けられない。
（やめて）
この男は怖い。美しい人ならざるその瞳に断罪を告げられそうな気がして。
（見たくない）
『それ』を見詰めるのが、認めるのが怖くて戦いた。しかし今まで自分をきつく射抜いていた紫の光がふと和らぎ優しく微笑して、強張っていた体から力が抜ける。
（あ――……）
「イシュタルを裏切らなかったから、だろ」
「……っ……」
言われた一言にオシリスは口元を押さえて息を詰める。
「認めたくなかったんだろ。リンデンバウムを傷付けたなんて」
自分も相手も裏切るはずがないと心から信頼していた相手。多くの命とリンデンバウム。その二択を迫られた時、自分は人の命を取ってしまった。リンデンバウムの心を無視して、よりによって『贄の樹』として服従させてしまった。
間違ってはいなかった。シェアディールとしては。その結果こそが望まれていたのだから。
だがオシリス・シェアディール個人としては――
「……オシリス」
愕然とした表情でリンデンバウムはその名を呼ぶ。
信頼を主従に置き換えてしまえば、裏切った事を認めなくて済む。
リンデンバウムが自分から離れる事は有り得ないから。
「そろそろ認めとけよ。まだ全員が全員の事を好きでいるうちに」
取り返しのつかないものを失う前に。まだ十分に引き返せるうちに。

「ふ……っ」
押さえた口から小さく嗚咽が零れ出る。きつく閉じた目の端から溜まった涙が頬を伝った。
「――……オシリス……」
「ごめ……っ、なさい、……っ。私……ッ」
「もういい。……悪かった」
自分が苦しかったのと同じぐらい、自分に拒絶されたオシリスも痛かったのだ。
「悪かった。お前に謝らせなかったのは俺だ」
「ぅ――っ、ぅ、うあぁぁぁあっ」
リンデンバウムの胸に縋り、二年前逸してしまった涙を流す。その肩を抱いてあやす様に優しく頭を何度も撫でた。
「……ヴァース。――……っの、有難う」
「別に。いいからお前も行って来い」
「あぁ。また後で」
「あぁ」
すいと踵を返すヴァースの背を見送って――イシュタルも二人の元へと歩み寄った。

第四章　王の行く先

「色々悪かったな。だがまあ安心しろ。作った火種は全部刈り取ってみせる」
「ヒルディアにその気が無いなら別にこれ以上は――ってか近いんだよッ！」
首に手を回し、もたれ掛る様にして話していたオシリスの肩を掴んで自分から引き離す。今まで女性どころか人との付き合いさえ疎遠になっていたヴァースには標準以上に魅力的な身体をしているオシリスとの接触はかなり照れる。
何か逆じゃねえかとか思いつつ、くすくすと笑うオシリスに赤面しつつ間隔を空けた。
「つれないな。お前のためなら何でもしてやろうって言ってるのに」
「そ、それはありがたいけどな。あんまり人に近付かれるの好きじゃねえんだよ」
「そうか？　人の体温って気持ちいいものだぞ。私と味わってみないか？」
「結構だッ」
ちらりとイシュタルに視線で助けを求めても楽しそうに笑っているだけで完全観客視点だ。助けようとする気配は微塵も無い。
「まあお前がそう言うなら仕方ない。そのうちにでもな」
そのうち、という単語にはちょっとぞっとしたが取り敢えず話が終わりそうなので突っ込まずにおく。
足を組み換えソファの背もたれに体重を預けるとオシリスはイシュタルへと視線を移した。
「で？　お前はどうするつもりだったんだ？」
「ヒルディアとシルギードを互いの盾にするつもりだったんだよ。まあヒルディア側にその気は無いみたいだから後はリエンに自治を認めてもらえればいいかなって思ってるけど」

「うん、まあそうだな」
積極的に戦争をしたがっているのはシルギードなのだ。シルギードがカラムの財力を手にすれば脅威となるのでヒルディアも同じく動いていたが、そうでなければそもそも侵略には然程乗り気ではないらしい。
勿論機会があれば別であるが、強引な手段に打って出る必要が今のヒルディアには無いのである。
「ヒルディアにその気が無いなら、何でここに招かれてたんだ？」
「……それは」
う、と言葉に詰まってオシリスはきまり悪げに言葉を切って答えを躊躇った。
「シェアディールといえど個人で出来る事は限られるからな。戦争を起こす事をリエンに持ち掛けたのさ。リエンもリエンで被害が少なく済むならって事で頷いたしな」
「リンデンバウムッ！」
オシリスが言い淀んだ先をさらりとオブラートに隠す事もせずリンデンバウムはあっさりと言い放った。
それがリエンの言う『猛々しい』評価の本体だった訳だ。
「何だ。今更だろ」
「……それはそうだが」
反論できずにオシリスは呻くようにして肯定する。
その通りではあるのだが、出来る限り負のイメージなど増やしたくないではないが。
「なら後はやっぱり竜妃の心積もり一つか。協力してくれるんだろ？」
しかし幸か不幸か、ヴァースにとって恋愛事は興味の範疇外であるし、そもそも好みとして気の強い女性は苦手なのだ。故にオシリス本人が気にする程には気にしていない。
それよりも今の関心事はカラムに尽きる。オシリスの協力が得られるならば何も自分が不慣れな事をしなくても安心できる。

「勿論。だがまずはお前自身がやった方がいい。リエンがどう言おうと必ずカラムは守らせるが、出来ればお前自身がリエンの信頼を勝ち得た方が角も立たないし後々もやり易い」
「……そりゃ、そうかも知れないが」
ここにそれを得意分野とする人間が二人もいるというのに、と釈然としない気持ちで――しかし同意はする。
「そういう事だ。後ろには私が控えているからな。大船に乗ったつもりで行け」
「では、そろそろ俺達は戻るかな。ずっとここに居ても邪魔だろう」
話の区切りがついた所でリンデンバウムは席を立った。自分とオシリスの周りに隠行の結界を張り、イシュタルと共に外に出る。姿の見えないオシリスとリンデンバウムと別れ自分に与えられた部屋に入って、イシュタルはごろりとベッドに横になった。
昨日は長い一日だった。――主に夜が。
（俺じゃあ、出来なかっただろうな。何も）
オシリスの、リンデンバウムの心を悟ってくれたヴァースだから、今こうして穏やかに居られる。もしヴァースが死んでいたら、きっと自分はもう本当に軍師としては立てなくなっていただろうし――こうしてオシリスの隣にもいない。
歪んだ関係のまま戻って、やはりいつかは逃げていただろう。
リエンを説得する手なんか幾らでもあって、確かにそれはヴァースにやらせる程の事でもない。自分がやっても構わないとは思ったが、イシュタルはそれは言わなかった。
あえてヴァースに求めるのは、おそらく見たいからだろう。自分達が惹きつけられるのは、彼がそれだけのものを持っている人だからと。
（俺はもう充分だけどな）
もし許されるなら、今後もカラムに留まらせては貰えないだろうか。
力になりたい。――ただ彼の為に彼の力に。

（……まだだるいな）
全員が出て行き一人になった部屋でヴァースは静かに目を閉じた。昨日は結局あまり寝ていないからもう少し休んでいいと思うのだが、あまりそんな気分にならない。
（何してんだ、俺）
確かにあの時、ヴァースが生きるにはオシリスを説得するしかなかった。リンデンバウムの趣味で殺されるのも御免だとは思っていた。
だがあの時自分が感じていたのは理由でなく心が感じたもっと単純な怒りだった。
どうにも調子が狂う。自分はこんなに人に影響されやすい人間だっただろうか。
（……判る訳ねーか）
幼い頃からヴァースの側には母しかいなかった。母が絶対に譲らなかったのでヴァースもファウストフィートに引き取られたが、居心地は決して良くは無かった。
そのヴァースを母はいつも守ってくれたが、守られる事しか出来ない自分が悔しかった。
物には苦労しなくなったが、それでも母が体を壊しまだ若かった命を失ったのはファウストフィートのせいだとヴァースは思っている。
……弱かった自分も含めて、だが。
（……母さん以外に『俺』と話す人なんかいなかったから）
もっとずっと冷めたつもりでいた。いや、自分で冷めていると思っていなければおそらくヴァースは耐えられていない。
（……嬉しかったのかも知んねえ）
面倒だと思った。御免だと思った。それも勿論嘘じゃない。
――けれどシアもイシュタルも嫌いではないから。

彼等が望む事に力を貸すのは、別に嫌な事でも何でもない。
「……認めてやるよ」
苦笑いを浮かべてヴァースは声に出して呟いた。
耳に入ってじんと脳まで届く自分の声。自分の気持ち。
自分自身にだけは嘘は付けない。――必死で生きるあの町を、守りたいと思う。
（となると、やっぱり後はリエンか）
自分を認めさせるなど、出来るのだろうか。イシュタルもオシリスも気楽に言ってくれるのだが。
（俺何もやってねえんだぞ）
カラムの事は勿論、上に立つ者の心構えすらも。
はあ、と溜息をついたその瞬間――どんっ、と鈍い衝撃音と共に建物全体がびりと揺れた。
（な――何だ今の）
発生源は外からだったような気がする。がらりと窓を開け外に顔を出すとまだ空気がびりびりと震えていて、植えられた木々が葉を揺らしていた。
「おぉ、すまぬな。起こしてしまったかのう」
「あ……？」
声は下から響いて来た。そちらに視線を落とすと、ヒルディア兵の格好をした男の襟首をリエンが掴んでいる所だった。兵に意識はなさそうであるし、少し引き摺ったような跡が地面に残っている。
（まさか、あんな子供が？）
状況は良く判らないが、まさかリエンが成人男子の体を片手で引き摺れる訳はあるまいと、一瞬浮かんでしまった想像を自分で打ち消した。
その間にリエンは近くに居た兵を呼び、倒れた男を押しつけるとぐっと膝に力を入れてしゃがみ込み。
「少し窓から離れておられよ」
「は？　はぁ……？」

良く飲み込めないまま頷いて、言われた通り数歩後ろに下がる――と、気合いの掛け声と共にリエンが地から跳び上がり、当たり前のように二階にまで到達する。窓枠に手を掛けそのまま、するりと中に入って来た。

「っな――！？」

4―2

見た物が信じられずに仰け反るとリエンはヴァースの反応に気を良くしてカラカラと笑う。
「おぉ、久し振りの反応じゃ。近頃はわらわが特別なのは普通になってしまったからの」
「あ、貴女は、一体」
「わらわは神子(かみこ)じゃ。信じられぬか？」
ふんと挑発的に笑ってリエンは腕を組む。
「未だに暗殺などという馬鹿げた真似をする者がいるのじゃ。そろそろ無駄だと気付かぬものかのう。大体わらわの代わりに誰を立ててヒルディアを治めようというのか」
成程、どうやら先程の兵は――兵の格好をしていただけか本物かは判らないが、とにかくリエンを殺害に来たらしい。
（って……こんな子供が一人で……？）
まさかとは思うのだが、ヴァースが下を覗いたのは音がしてすぐだ。その時は確かにリエンしかいなかった。
「小娘一人がことごとく刺客を返り討ちにすれば、竜妃の名も少しは真実味が出ると思わぬか？」
にっと凄みのある笑みを浮かべたリエンだが、逆にヴァースはほっとした。
（そうだよな。ドラゴンマスターとか何とか、本当な訳）
「とか言っとけば安心かのう」
「はっ？」
「お主は政治家にしては顔に出過ぎじゃ。わらわは嫌いではないがな」
（……結局どっちなんだ）
しかし今リエンに訊ねてもどうせ正しい答えは返って来ない気がして問い掛けはしなかった。

「お主も勿論知っておろうが、わらわ達の生きるこの世界では真実などよりもどう見せるか、これに尽きる」
それは判る。ヴァース達がヒルディアに来たのもそもそも『側からそう見せる為』という理由でしかなかったのだから。
「貴女が竜妃である事が周囲に見せるヒルディアの『知』という事ですか」
「『知』というよりも『力』そのものじゃな。まあ、カラムよりは難しくはない」
「……」
すいとリエンの瞳から笑みが消え、空気が一段静かに張り詰めた。来るなと悟って自然体が緊張する。
「のう、ファウストフィート公。お主は今回の件をどう収めたい」
「どう、とは？」
「わらわは構わぬよ。シルギードは正直目障りじゃ。このままいつ仕掛けられるかとジリジリするよりもずっと気も楽になろう」
「……っ」
平然と言ったリエンの言葉にヴァースはごくりと唾を飲み込む。ここでイエスと言ってしまえば戦の始まりだ。リエンはおそらくカラムの自治を認めてくれるだろう。いや、そうでなければヴァースが頷かない。
だから――ここで頷いても、カラムとしては最悪ではない。
「どうじゃファウストフィート公」
「……俺は」
これを言ってしまえばリエンを不快にさせるだろうか。しかし自分の心は誤魔化して頷く事を拒んでいる。
「俺は戦を起こしたくはありません」
「ほう。向こうがその気で、隙あらば狙ってこようとされていてもか」
「それでもです。貴女がカラムと繋がっていて下されればそれは十分な抑止力になるはずです」

正式にリエンが自治を保証してくれれば、自分が死んだ後の段取りを付けておいていい。
「何故他国を踏み躙る事でしか利を得ようと出来ないのか俺には理解出来ないしする気も無い。どんな理由があったって人が人の命を自由になど、許されるわけがない……ッ」
「……ふふん」
一瞬リエンは眼を見張ったが、すぐに表情を造って鼻で笑う。
「戦を選んだわらわに言うとは、中々の度胸じゃ」
「あ」
言い方は選ぶべきだった。指摘されて慌てたがリエンは怒るどころかくすくすと楽しそうに笑っている。
「リエン様」
「じゃが全てを守る事など不可能よ。なればこそ、王は犠牲を最小に抑えねばならぬし犠牲となった全ての責を死の後までも持って行く。その覚悟無き者が王となれば無駄に犠牲が増えるばかりよ。わらわはお主が嫌いではないが、王としては付き合えぬ」
どくり、と胸が狼狽に高鳴った。リエンの宣言は疑いようなくヴァースを認めないものだったから。
「まあ安心するが良い。とりあえずカラムへの手出しはするつもりはないし、シルギードが動かぬ限りこちらも動かぬ。まずはそれで満足であろう」
「……はい」
正しくそれがヴァースやイシュタルの望んだ答えだ。ヒルディアにしてみれば当初からそう変わる路線でもない。
望みの答えは与えられたが、ヴァースの心は重かった。
王としては付き合えないと明言されてしまえば当然だ。
「戻られよファウストフィート公。お主の民を守る為にな」
ふわりと身を翻し、今度は窓からではなくちゃんと扉から出て行った。
パタンと扉が静かに閉められ、ヴァースはその場で脱力して座り込

む。
（何か、初っ端から出鼻挫かれた感じだ）
やってみようと決めた直後だったから余計自分の適性を疑ってしまう。まあその方が当然なのだ。イシュタルやオシリスの方が親しくなってしまったが故の欲目なのだろう。
（ま、ヘコんでる場合でもねえんだけど）
とにかく望みの回答は貰えたのだ。今はそれで良しとしよう。技術はこれからでも急いで学んで、次交渉できるようになっていればいい。
（……ってか、そうか。もう出て行けって言われてんだな）
今すぐ急いでという訳ではないだろうがここに留まる意味は無くなった。そうとなればヴァースとて時間が惜しい。
立ち上がり部屋を出て、向かい側のイシュタルの部屋をノックする。以前の事を思い出して寝てるかと一瞬思ったがすぐに扉は開けられた。
「ヴァース。どうした？」
「中、いいか」
「ああ」
体をずらして道を開け、ヴァースを通してから後ろ手に扉を閉める。
「どうしたんだ？」
「さっきリエンと話した」
「早いな。どうだった？」
「――一応、カラムには手を出さないと言ってくれた。シルギードが動かない限り動くつもりは無い、とも。後は俺が死んだ後の方向性を大々的に決めておけば良し――だよな？」
死ぬつもりはないが、シルギードへのアピールは重要だ。万一の事があった時でもすぐに動けるようにもしておきたい。
「ああ。……ってか、暗いな？　求めた通りの結果だろ、何沈んでるんだ」

「お前に言う事じゃねえかも知れねえけど。リエンに王としては付き合えないって言われた」
今のシルギードの存在はカラムにとって明らかに脅威だ。もしヴァースが死んで後手に回った時、例えどんな準備をしていたとしても今ヒルディアと共に先制するよりは確実に大きな被害が出るだろう。
災いの芽は早いうちに摘む。それは判らなくは無いのだ。
「そして多分、リエンが正しいんだろ」
「……」
ヴァースのそれは心情を誰かに吐露したいだけの独白に近い。だからという訳でもないがイシュタルは黙って先を聞いた。その表情は若干厳しいものだったが話しているヴァースは気が付かない。
「俺にシルギードに殺されないだけの力がありゃいい。けど俺には確かにそこまでの力は無い。――けど、だからって防げるかもしれない人死にを許容するなんて――」
それが出来ない者が王となれば、無駄に犠牲が増えるばかり――
「……多分、俺は」
「ヴァース」
きつく、やや怒ったようなイシュタルの声にヴァースはびくりとして顔を上げる。
「その先は聞きたくない。自分を軽んじるなって言ったはずだ。俺はお前の判断を信じてる。――リエンはそれを望まれてなった王なんだ。けどお前は違う。お前は今のまま人の命を慈しめる王でいろ。人一人こそを見捨てずにいる王に」
「……それで町を殺させたら最悪だろう」
歴代の領主の中でも相当の悪名を負う事になるだろう。いや、自分の評価は終わった後なら何も気にする事は無いのだ。
だが命だけは取り返しのつかないものだから。
「起こさせないさ。起こるのを恐れて逃げて妥協すれば、確かに最悪は防げるだろうさ。それは確かに間違っちゃない。でもそれじゃ

あ笑えないんだ」
　心の中にある、ああしていればという想いがあればある程、後悔はいつまでも重くのしかかって来る。
「俺を信じろ。その為の軍師だろう」
「……イシュタル」
（――ああ、そうか）
　リエンはこのままならいつか――遠からずヴァースは死ぬと思っている。しかしそれにヴァースが揺さぶられる事はイシュタルを信じない事に繋がってしまう。
「悪かった……」
「いいさ。不安になって当然なんだ。人の命の重さなんだから。そうやって俺も逃げたんだし」
「でも戻るんだろ」
「ああ、いつか、な」
「いつか？」
　今すぐにでも戻りそうな口振りだったのに、歯切れ悪くイシュタルはそう曖昧に濁した。
しかしこの騒乱の解決はもうすぐそこまで迫っている。濁していても仕方ないと覚悟を決めたのか、きっと顔を上げてヴァースを見た。
「――っ、の、な、ヴァース。出来れば――しばらくカラムに滞在させてもらえないか」
「は？」
　ヴァースにしてみれば唐突なイシュタルの申し出。唖然とした様子のヴァースに焦ったようにイシュタルは言葉を重ねる。
「そりゃいつまでもシェアディールが居座ってたら迷惑なのは判ってるさ。けど俺はまだシェアディールじゃないし、ってコレは駄目だな、その、だから」
「ちょ――ちょっと待て。だってお前、帰るんだろ」
　言い募るイシュタルを遮ってヴァースは自分が困惑している根本的な部分を問う。迷惑その他は今のヴァースの頭には無い。

「いずれは帰るさ。でも、もう少し――」
（お前の強さと共に在りたい）
本当の言葉は寸での所で飲み込んだ。そう思われる事はあまりいい気分ではないだろう。『強い』自分を期待されるのは重荷だ。だから口に出したのは違う言葉。
「見聞を広めておきたい。それにはカラムは絶好の場所だし」
「別に俺は構わねえけど。元々カラムは自由都市なんだし、お前が居てくれるなら安心だ」
「――そっか」
あっさりと頷いたヴァースにほっとしてイシュタルは緊張が緩んで笑顔になった。
「――って、と。じゃあそろそろ帰ろうかと思うんだが」
「そうだな。シルギードの出方も見たいし、竜妃と姉上達に挨拶して帰るとするか」

4―3

「お帰りなさいませヴァース様」
出迎えに出て来たシアは少し疲れているようだったが変わらず元気だった。ヴァースの帰還に安堵してその表情はここ数日の沈みようを全く感じさせない程明るいものへとなっている。
勿論その場に居なかったヴァース達にその変化は判りようもないが。
「ああ、どうだった、こっちは」
「特には何も。ヴァース様達が戻られる少し前にシルギード国内が騒がしかったようですけれど」
「ふふん。俺達がリエンと会ってたのが伝わったな。それから何も無いんだな？」
「ええ」
肯定したシアにイシュタルは満足そうに頷いた。侵攻の準備が無いという事は、おそらくシルギードは武力行使で強引に来るのは諦めたのだろう。
「ヒルディアはいかがでしたか？」
「まあまあ、じゃないかと思うが。とりあえず自治は認めてくれたよ」
ヴァースにしてみればまあまあという評価も甘く感じるが、当面の問題だけで見るなら『まあまあ』、でいいだろう。
何よりも折角の朗報で喜ぶであろうシアに無用な気苦労は掛けてやりたくない。適性での悩みなどヴァース個人の問題でいいのだ。
「そうですか……良かった……っ」
そして手を胸の前で組み、ほうと心からの笑みを浮かべて吐息と共に呟かれたシアの言葉にやはりそれでいいのだとヴァース自身もほっとする。
（まさか本当に自治を守れるなんて）
自分すら信じていない状況で、勝手に巻き込んでしまったという

のに。
「ありがとうございます、ヴァース様。それとイシュタル殿」
「うわこそばゆっ。殿もいらないから、本っ当。つか敬称全般止めてくれ」
　このままだと延々別の敬称を付けて呼ばれそうな気がしてイシュタルはそう先に頼んでおく。これからしばらくカラムに厄介になるのだから当然シアとも多く顔を合わせるだろう。
このよそよそしさは良くない。演じるのは得意だがイシュタルの素は馴れ馴れしい方に分類される。
「それで、だ。帰って来たばっかりで何だが二人に話したい事がある」
「何だ？」
「なんでしょうか」
「一度シルギードを見てみてえ」
　ヴァースの言葉に二人は唖然として固まって――
『――はぁッ？』
　全く揃って予想通りの反応を返してくれたので耳を片方塞いでやり過ごした。続いて来たのはやはり予想通りというべきか、怒涛の反対。口火を切ったのはまずシアだった。
「正気ですかっ。相手は貴方を殺そうとしている相手ですよッ？」
「だからだ。このままじゃいつまでもピリピリしてて落ち着かねえだろ。出来りゃ直接王に会ってシルギード側からも自治を認めさせてえ」
「シルギードが何でそんなに戦いたがってるのかが判らないからどっちにしろそれは調べるつもりでいたけど、何も今お前が行く事ないだろうっ！」
　むしろ領主自らが動く方がおかしいと言える。そんな事は判っている。
――自分の力が足りない事も、勿論。
「確かに俺が行く必要はねえ。単に俺が見たいってだけだから。一

応死ぬつもりはねえけどその時の為の用意はちゃんとしていく」
ヴァースに血縁はいないのでファウストフィートは絶える事になるが、次の領主は指名していけばいい。勝手に名乗りを上げる、本当に血が繋がっているかどうか判らない遠縁よりは優先されるはずだ。
「何故そんな……」
「――俺は、出来りゃこんな危うい関係じゃなくて、もっと本当に平穏に互いに行き来出来りゃいいと思ってる。カラムが出来た理由を考えりゃ突飛なのかもしんねェけど。けど、それにはまずシルギードが何を欲して戦いてェのかを知らないと話にならねえだろ」
「……単に自分の支配地域を増やしたいだけかもしれませんよ」
周辺の民族を統一し強大な国となったシルギードだ。他国に対しても同じ感覚でいてもおかしくない。
「それならそれで仕方ねえだろうな」
そういう考えの人間は、おそらくいなくはないのだろう。話の通じない輩であれば武力での対抗は止むを得ない。――例えそれが真に平穏とはならなくても。
「それを決める為にも、直接会ってみたいと思ってる」
「ヴァース様……」
「ただこれは俺個人の理想で、カラムの為っつーなら俺が動くのは馬鹿な事なんだろう。一応領主名乗っている以上、勝手に行くつもりはねえ」
今自分が死んだら間違いなく迷惑がかかる。――だから。
「どうしてもっつーなら、諦める」
「……卑怯な物言いをされますね」
困ったように――しかしどこか嬉しそうにシアは微笑む。
「どうしてもと仰るなら私も参ります。私が勝手に巻き込んだ事に貴方は十分過ぎる程骨を折って下さったから。その貴方がカラムの為にする事を私が止める訳にはいきません」
「……シア」

カラムの為ではある。だがやらなくても不都合は無い事。
それに真っ先にシアが頷いてくれたのに、正直ヴァースは驚いた。
彼女は自身の目的よりもヴァースの目的を取ってくれたのだ。
「……悪い」
「いいえ。ファウストフィートが貴方で良かったと、今はそう思っておりますから」
関わりない人の苦痛にすら、心を砕いてくれるヴァースだからこそ。
「今度は残れとは仰らないで下さい。今のカラムにとって貴方を失う事の方が余程痛手なんですから。――守らせて下さい」
今度こそヴァースの隣で、自分の手で。
「イシュタル。頼む」
「――……仕方ないよなぁ」
頭の後ろを掻いて諦めたような息を吐き、イシュタルも苦笑して頷いた。
「ま、主の望みは可能な限り叶えるのが腕の見せ所でもあるし？お前のそーゆー真っ正直に誤魔化せない所、好きだしな」
そうあってくれと言ったのもつい最近だった。その自分が安全の為に意志を曲げろというのもおかしいだろう。
「――では、やはり変装はしていった方がよろしいですね？」
「ああ、ヴァースの容姿は有名だから。幻術も掛けてくけど見抜かれない保証は無いし、実際に変えて行った方がいいだろうな。眼は仕方無いけど少なくとも髪は」
「そんな勿体ない事をするもんじゃない。髪が傷むだろう」
さら、と後ろから頭の両脇の髪を梳く男の手にヴァースはぎょっとして振り返った。
「リンデンバウムッ？」
「お前っ。何でここにっ！」
つい数日前しっかり別れ、今はヒルディアにオシリスと共にいるであろうリンデンバウムがそこに居た。

「何、お前等だけじゃ道中危ないだろうってな。ヒルディアからカラムの間で襲われないとも限らないだろ？」
　オシリス自身はヒルディアの王宮内にリンデンバウムが帰って来るまで留まる事になっているのである程度安全だ。何も無いならそれで良しと、念のために頼んだらしい。
「面白い話だと個人的には賛成だが、あんな不安定な地域にお前等だけじゃ心許無いだろう。オシリスの許可もある事だし、俺も付いていってやる」
「結構です。ヴァース様の身は私が護りますので」
　ヴァースを庇って前に立ち、きっとシアはリンデンバウムを睨み付ける。
ヒルディアでの詳しい経緯はまだ聞いていないし会話からして現在敵でない事は判るのだが、相手は一度ならずヴァースを襲って来ているのだ。いい感情がある訳も無い。
「ふうん？」
　目を細め、上からシアを見下ろし観察する様な間が数秒あって。
「お前も中々面白そうだ。魔力は話にならないが武術だけなら大したものだろ」
「ふざけんなっ、シアは」
「判ってるさ。お前の陣営の人間に手は出さん」
　言われるまでも無くそんな事をしたらオシリスからもイシュタルからも怒りを買うだろう。流石にそれは遠慮したい。折角二年振りにわだかまりも解けたのだし。
「お前がヴァースを守るってならそれはそれでいいさ。俺はイシュタルを守らせてもらう。俺の力はあって悪いものじゃないだろう？」
「それは」
（そうなんだが）
　微妙にまだ不安が残る。リンデンバウムが殺人快楽者なのも本当なので。
「いいじゃん。俺もヴァースも、ってか多分シアも実戦なんて殆ど

した事無いし。来てもらった方が助かるって」
「ヴァース様……」
「……判った。来てくれ」
確かにリンデンバウムは一流の実力者だし、十分理性的だ。趣味で自分の行動を決める事はしない。
「……ヴァース様がそう仰るなら」
「決まりだな。お前の容姿は俺が幻術で隠してやる。安心しろ、見抜ける奴はそういないぞ。ましてシルギードには教育機関が整ってないからな」
魔術というものの造詣がそもそも浅いのだ。
「……カラムはこれだけ豊かなのに、すぐ隣のシルギードは教育すら整っていないのか……」
「軍事にばかりかまけているからです」
辛辣にシアは言い放ち、同情すら見せなかった。
「ベクストル自身が悪い王という訳ではないんだが、まあシルギードの状況と性質上仕方無いだろうな」
「――そうなのか？」
『狂王』ベクストルに関しては悪し様に言われているのしか聞いていなかったので擁護するようなリンデンバウムの言葉は意外だった。
「シルギードの成り立ちは知ってるな？」
「周辺諸国の多民族を制圧して今の領土になった……ん、だろ？」
「そうだ。だがそんなお国柄だ、国内ではいつも争いが絶えなくてな。実質シルギードが落ち着いたのはベクストルが王になってからだ」
「武力で、でしょう」
『狂王』の名の由来はそこからだ。冷徹に、大胆に、見る間に反乱分子を制圧し――そして圧政を敷いていった、強力な王。
「武力でしかどうにも出来ない時もある」
「だからと言って他国を侵略していい事になどなりません」

「確かにな。だがベクストルの手腕が確かなのも事実なんだ」
勝てないのが判っているからこそ、シルギードは今カラムに手を出してこない。状況判断も正しいのだ。
「だからこそ、余計に聞いてみたいだろ」
話し合えないかどうか、話してみたい。
「やってみりゃいいさ。この町の主はお前なんだから」
「ああ。――頼む」
「はい。お任せ下さい、ヴァース様」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8865w/

イデアール

2011年10月11日09時55分発行